

不死

目次

序章 特進指定国立南篠崎高校	6		
〔42／37〕 高校裏の修道院	8	*白井物理教師	若林 深山真希
〔37／18〕 疑似バクテリア	22	*白井物理教師	深山真希
〔45／17〕 不死証明事件	38	*若林 コンテ	HC
〔9／23〕 人間のさなき	62	*若林 HC開発	
〔55〕 千葉に染み込んだ男	76	*若林 (HC開発者の責任)	
第二章 不死	91		
〔250⇩∞〕 不死の行方概説講座	94	*白井名誉教授	
〔250⇩∞〕 精子採取センター	113	*白井名誉教授	
〔250⇩∞〕 霊波動作家	118	*S K Q	
〔170⇩∞〕 学徒家	134	*S 妻	
〔290⇩∞〕 大江戸川区立高校	150	*K (篠原啓吾)	
〔400⇩∞〕 海洋都市	162	*S リユウ	
〔350⇩∞〕 テストパイロット「K」	174	*K 美貴	
〔420⇩∞〕 研究室長の遭難	192	*S E N山 K G	
〔360⇩∞〕 セントアキノス	208	*K 美貴	

(370+∞ “)	軍事レスキュー	224	*K	
(410+∞ “)	Kと美貴の団地の扉	240	*K	美貴
(420+∞ “)	愛人血秋	256	*S	血秋
(420+∞ “)	美貴の暴走	264	*K	美貴
(430+∞ “)	調書自己申告概要	274	*犯罪者E	
(550+∞ “)	潜水艦と美術運搬船	280	*S	妻 リユウ 父親(白井)
(555+∞ “)	蘇生後の接続器	302	*S	妻 リユウ
(600+∞ “)	極高深度研究室	320	*K	美貴

第三章 昇天 349

3570+∞	宇宙への適合	352	*S	d	父親(白井)	母親(深山真希)
4500+∞	K乗船	368	*K	美貴		
5000+∞	呪書	388	*K	S	美貴	父親(白井)

――内は年齢 頁 登場人物

あなたがたの命の血を流す者には、わたしは必ず報復するであろう。
 いかなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう。

序章

特進指定国立南篠崎高校

42 / 37

高校裏の修道院

ここでは土曜日も平日と変わらず授業が行われる。そわそわと午後の光を遠く見つつ物理教師の白井が声をかけてきた。

「若林先生、土曜日ぐらいはのんびりしまようよ。生活指導巡回行きませう？」

「そうですね。」

職員室を見回すと、我々の怠業を咎める者も無し。

「行きましよう。修道院喫茶ですか」

我らの職場は日本で唯一の天才児対象特化校。それは高学力の生徒には不似合いな大きな繁華街の中にあつた。学力の高い学校はそもそも生徒が優秀なので、生活指導の必要がほとんど無い。制服もなければ校則もない。始業式も終業式も放送のみで、わざわざ整列したり歌を唄ったりする社会訓練はしない。優秀校ほど自由が許され生活問題に無頓着。その法則に沿ってか、日本一優秀なこの学校の裏には遊興施設がひしめき、私や白井のような勤勉でない者を誘惑し続けている。更にその遊興的誘因力を強化演出する固有の気候にも恵

まれていた。砂漠地帯の端にあるこの繁華街は、いわばオアシスに当たり、不毛の砂丘を越えてきた風が街全体に低湿度の空気を供給する。この国の農業に大きな影響を与えた気候変動だが、下着のように汚れた類の者が集まるこの地域には有効だ。以前のような陰鬱な世俗臭は消え、ゴミ集積場の肉汁も、深夜に滴った血痕も、さわやかな風が常に吹きつけて乾燥消毒してしまう。

それと呼応するように、この街全体が白で統一され始めている。私が勤務するその高校も白い。水道の蛇口まで白い。清潔感というよりは安物ペンキによるパウダー状の手にこびり付く白だ。以前、日本人の白好き傾向は、色選択を放棄した結論でしかないと思われていたが、ここまですると確かに好みなのか。平和の鳩のような、天国のような、いや白骨のような。そして、それに犯されるように、この町の中心まで白く砂漠化してゆく。白ペンキ塗りに参加しない建物もそれからは逃れられない。以前は湿気で黒く変色したコンクリートも、白く乾燥によって劣化している状態。さらに粉状に崩れて赤く鉄骨が露出した壁面に、純白の恐怖の中、唯一の彩りを見出す。

坂道の途中にあるカソリック垂派の修道院もぼろぼろに傷んでいた。補修はされているようだが、所有者自らの手によるのであろう、素人らしく手際が悪い。高所には手が付けられないので、脚立や梯子で届かない範囲は風化にまかせているし、すでにいくつか大きな穴があく。

その建物の二階は修道院、一階は店舗となつて、若者にも人気があるカフェと雑貨店。経営は尼僧達だ。灰色の清潔なベールをかぶつて、太い木製の数珠で綴られたロザリオを首にかけて、苦味の強いコーヒーと堅いビスケットを適価で商う。レジスターの横には会堂修繕費と書かれた募金箱があり、透明な箱の口いっぱい大金がこれ見よがしに詰め込まれ、新たにそこに紙幣を詰めるのは工夫が必要だ。十分に金が貯まっているその箱を見て、ほとんどの客はこう思う「一刻も早く箱を開け、倒壊寸前のこの建物を直すべきだ」と。だが、神の

宮であるこの建物が崩されるはずはない、と思うことこそが、尼僧達の信仰の象徴となつてしまっているのだろう。店内の雑音に紛れて聞く尼僧達の唯一の台詞は「神の奇跡によつてこの建物は保たれている」という誇らしげな客への答えだ。無防備な募金箱が悪人の餌食にならない不思議もあり、その神の奇跡とやらの妙な説得力があるのだった。

「わはは、これはまた、相変わらず近くで見るとボロボロですね」

ここは日本かと疑うほど改装改善の意識に欠ける。店全体、至る所が老朽化して、崩壊してしまった部分はほつたらかしくなっているが、掃除は行き届いていて、ヒビ一つとっても割れた角に味わい深い艶が出ている。黒ずんだ木材には浮き出した年輪が現れ、年月をかけて雑巾で拭いている証だ。

店に入つて必ず話題にするのが、この店の珍しい建築的特徴だ。この建築物は特殊な耐震構造を備えていて、振り子免震基礎と言うものだが、外観がとても大げさだ。蒸気機関車の動輪のような巨大な輪が四方のレールの上に載せられ、車軸に付けられた太いバネが建物を支えている。これで横揺れを吸収しようという仕掛けだろう。かつて、何回か地震に見舞われているが、このおかげで倒壊を免れているそうだ。車軸にはグリースがたっぷり塗られている、そして半分はグリース状に劣化した分厚いゴム。しかし、いかに劣化しようとも単純な構造は丈夫で、錆びても軸が折れない限りは稼働して、おんぼろの寺院を地震から守ってくれている。

昨年春に、赴任してきた白井を連れてこの町を案内していた折り、初めてここに入った。店内にも据えられた大きな耐震動輪に物理学教師らしく感心し、その真横の席に腰掛けて以来、この店ではその席と決めていた。その大げさな珍しい構造は、とても目を引く看板効果があり、林道で出くわすトロッコ鉄道の線路遺跡のように好奇心をそそる。

「そう言えば、この噂聞きましたよ。この車輪、昔の電気機関車の流用品だそうですね」

「しかも大勢の自殺者の血を吸っている先頭車両のもの。でしょう、若林先生。私が考えるに腕組みしながらもっともらしく、しかも猟奇的な方向へ話を進めてゆく。」

「ここですね、車軸の内側、ここに多くの血飛沫が飛んでいるのです。外側じゃなく。こう、巻き込まれちゃう訳ね」

「バラバラになるのは下の隙間によりり込まれていく回転方向に肉体がついて行けないからです。凄惨なものです。私は見たこと無いですけど…これからも見たくないですね。臼井先生は見てそうですね」

「ええ、わたし、遭遇したことがあります。女でした。私の物理教師としての持論なんですがね、女性には物理的注意力に欠ける傾向があつて、その類の失敗をよくやらかすんです。その亡くなった自殺女性もね、ちよつとそこが欠けていて、ホームの先頭車両位置で飛び込んだの。普通は最後尾車両位置で飛び込むでしょう、電車が入ってきたばかりで、スピードが出てますから一瞬で済むし、確実だし。しかし、私の並んだ通勤快速待ちの列の先頭にいたその女性は、ほとんど止まりかけてた列車に飛び込んだんですよ。そしたら、当然急ブレーキかけられて、半分轢かれて止まっちゃつたの。電車もそれ以上動けないんですよ、車体下の構造と人体が、しっかり噛み合わさつてるからね。救命しつつね、時間かけて部品外して、救出したんだけど、亡くなっちゃつた。長時間苦しんで死ぬことになるのは、ホームを先頭側に歩いている段階で計算できなかったんですかね」

「うーん、顔はどうでした。轢かれたのは体の半分ですよ。頭部は損傷しましたか？」

「いえ、きれいに、残りましたよ」

「じゃあ、意外と物理的才能を駆使して醜い死に顔にならないように調整した結果なのでしょうかね、その飛び込み位置」

「うまく下半身だけ轢かせたと、うわあ、そう、かも、しれせんね」

「猟奇的な表現を平気でしゃべり倒してたくせに、女性の心の動きに想像が触れたとたん今にも嘔吐しそうなダメージを満面に表した。」

「若林先生、それは酷いね。惨すぎるね。確かにそうでしょうね。ひゃあ悲しいなあ」

「でもそう計算していたとしても、少し間違えば、上半分が轢かれちゃうことも、さらに言えば縦に半分とか、頭部だけとか」

「ぐあああ、やめてええ」

こんな話を校舎内ですることは決して許されない。児童心理に則した詳細なマニュアルがあつて、そこから逸脱することは決して許されないのだ。

「は虫類は情が移らないから嫌いだ」と言っただけで移動された生物の教師がいる。動物愛護批判と、好き嫌いの感情表現の誤用。

この特進高校に限つては教師としての優秀も無能もない。我々の優劣を決めるのは、観察結果に影響を与えずに観察対象と関われるかどうかという研究者の冷静だ。東京地区全域から異常天才を集めるこの国立高校は極めて特殊な目的の為に利用されている、言わば大きな実験観察棟だ。明言はされないが教員免許のない私がここに赴任している事からも、それを裏付ける事が出来る。赴任辞令の発行も私の関与していた研究機関内からであった。臼井物理教師もそうだが、この高校の教師達の多くは様々な研究機関から落ちてきた元科学者達だ。お互いに深く詮索はしないが、それぞれの事業の中心にいた者達で、その結果の責任を取らされてここに来た。自分達の所行を見届けろと言う事か。教師としてではなく観察者として、私達は胸ポケットに忍ばせた音声レコーダーのスイッチを常に入れていて、生徒達に現れる作用を収集し対処しなければならなかった。赴任初日に

レコーダーを支給された時にもその理由は伏せられたまま、何かは察しろと言うことだ。ここは多くのタブーを束ねて学校という体裁に整えられている場所なのだ。しかし、相手はまだ子供であり、指導と観察の両道を律するのは大変な心労を要する。生徒が可愛くなればなるほど裏切っている事が辛くなる。そして油断し、失態を演じてしまうのだ。一時も気を抜けない。そこで、学校の近くのこの珈琲を飲むとき、我々は職場の緊張モードを解いて本性を出す。二人とも比較的心が裸になってしまい職員室では出せない話題に興じる。そんな場所として定着し、心の健康を守るために頻繁に活用した。

今日も我々は特別補習の合同を利用して校外に出て、此処に座っている。

「一応博士号取って世に出ましたがね。ちよつと失敗してここに来ちゃった。でも、まだ諦めちゃいませんよ」
何故かこの修道女が出す珈琲は、愚痴っぽいエネルギーを引き出すことには酒の数百倍の効能を持つ。ミッシェン系の施設と言えば、どんな俗物でも聖人善人人気取りしてしまう先入観があるが、このおんぼろ修道院喫茶は違う。本当の救いとは俗世からの解放ということか、気取りがとれるのだ。正面の扉が無く往來の喧噪が店内に響いて、また程よく繁盛していて騒がしいことが主な理由だろうが。

「赴任早々担任で面食らいました。もしか、悪意によって、あのクラスを押し付けられたのかな。」

「白井先生、それは間違いなく押しつけられたんです。あのクラスを皆倦厭してます」

「彼らは異常天才ですね。非常に不気味ですね。はじめ、サヴァン症候群かアスペルガー障害かなと、しかし、とつても健康な心身のバランスをもっています。みんなとても健康です」

「先任の先生も同じ事言っていましたね。唯一の結論として不気味だつて」

「調べましたらね、中学校の時はそんなに優秀でもないんですよ。転入前の学校に受験するのが適当な、まあまあな学力。天才達全員がそうです。さいきん突然天才的になった。ここに来て更に異常に天才的になってきた」

「先生の教育の成果つて事？」

「そんな努力してない、私」

「そうっすか」

「そうっすよ。あれは教育の成果ではなくて、何か別のね」

驚異的な学力に感心する以前に、何故そうなったのかを追求すると、チクチクと良心が痛む。自分達の野心の犠牲者である事をその結果が訴えるのだ。

「UFOに連れ去られて高能化の手術を受けたとか、陸軍の実験だとか、校外外からの噂が尽きませんね。とにかく変な差別に繋がらないように注意しないと。私なんか努めて教師が優秀だとか吹聴して対抗イメージ作りしてますよ」

今や父兄の間でも都市伝説めいた謎となっている。数年前から発現し始めた高能化だが、学力適応処置と称して発現者は次々と元の高校から引き出され、此処に集められてくる。そして更に異常天才となった者が漉されて特選学級に集められてゆく。その生徒達の能力の数値化をし、日常生活を観察するのに合理的だからだ。そして今は新任の白井物理学教師がその担当を押し付けられている。

「何にせよ、天才の彼らに、この国のいかなる教育機関も必要ないでしょう。この世のどんな試験問題も解いちゃいますからね」

変異して自分たちよりも高等となった生き物。それを実際に目の当たりにしてしまうと、どうなるのか。この物理教師の反応に興味深く現れていた。畏怖の念。その細部は憧れと嫉妬と恐怖だ。

「彼ら、フェルマーの最終定理。当たり前のように解きましたしね。と言うか、3パターン回答に上がったきた

んですが、私、あのアンドリユー・ワイルズの例以外知りませんもん。それも知っているだけ。グロタンディエーク宇宙とか言ってるね。3パターンともそれじゃないやつ。私の知能を越えた絡み合いがいくつもあって混沌にしか見えない。でもきつと正解だろうなと印象付けるだけの威厳に満ちているの。私には全く雲の上の世界で、採点しようがありませんでした。世界の数学者に見てもらったらいと思っんですよ。とにかく一介の高校教師に、なにか教えることができる人達じゃないです」

ついに敗者と言うよりは信者という状態になっている。
「フェルマーの楕円曲線のやつ、やつつけるつもりで気取って問題出しといて、採点できませんでした、恥ずかしかつた」

突然、誰が見ても、自己嫌悪に陥った瞬間だと判るように、頭を抱えて「グウ」と一うなりすると尼僧コーヒーを一すすり。

「どうせ僕は天才じゃないんで。高校の頃はフェルマーと聞いて、フェラチオって言葉を連想した。フェダけしか一致しないのに。そんな感じなんで。あたしゃ。しかし、ときに若林先生、フェラチオって語源、知ってますか。ラテン語でFELTAREフェラーアクチニーデ。吸うイソギンチャクって意味です。嘘ですけど」

下品きわまりないことを大声で言う癖があるこの男は、心がポロポロのようできて、しかし楽しそうだ。だが、この男の下品な態度が、最近、徐々にエスカレート気味だ。酒の席ならまだしも、ここは職場のテリトリーでもある。生徒の前でそんなことを言っつては免職もの、私は思わずあたりを見渡してしまった。そして、危惧したとおりの状況を発見した。

「あ、白井先生」

「ああ、そうでしたね。でも気にしなさんなって、誰も聞いてないですよ」

と暢気な白井。しかし、事は少々厄介だ。私は店の入り口に我が校の制服を発見していた。

女生徒だ。通りがかりではなく、何か目的があるのか、少し前からじつとこちらを伺っていたようで、佇まいに時間の経過を感じる。

「白井先生、生徒がいます。入り口に」

ここは道路側の壁のないオーブンカフェで、風が良く入ると同時に声もよく通るのであった。まだ授業中の時間。制服を着た生徒が現れる時間ではない。

「だ、だれ？」白井は首を後ろに捻ってやらかした失敗の程度を探る。

「あらら！ほんとだ。しかも女性徒ですね」

その女生徒は白井を認めるとホウツと安堵のため息をつき、まるで、遊園地で家族とはぐれた迷子父親を見つけた娘のような、大人びた仕草。しかしすぐに表情を戻し、私を一瞥すると軽く会釈をして店内に入ってきた。

「ほら、若林先生、紹介します。この子、うちの特選クラスの」

「深山です」

切れ長の目が美しい。確かに利発そうな面立ち。それにしても白井はまるで慌てる様子もなく、その深山という女生徒を迎え入れた。投げやりなわけではなく、非常に落ち着いている。普通の対応は指導として飲食店に出入りする事を咎めるものだが、どうやら、私には黙っていたが、この教師はこの子とここで、待ち合わせていたようであった。

「こんにちは。お話中のところ申し訳ありません。先生に大事な用事がございまして」そう言うときポケットからメモ帳型の携帯端末を取り出して、白井の目の前に開いた。それを受け取りながら。

「いやあ、驚かせて済みません。実は、この生徒とここで待ち合わせていました。まだ言ってませんでしたが」授業中に、外の店で、女生徒と、密かに待ち合わせる、などとは、今の職場においては恐るべき懲戒解雇級の重罪。だが、さも当然の些細な秘密の暴露として、私に対して軽く謝罪に似た表情を作り、アツサリとこの場を処理してしまった。携帯端末の薄い紙状のミネラルディスプレイには動画が再生されているようだ。

「ホウホウ。出来るとは思っていませんでしたけど。思ったより速いですね。これは間違いないですね」メモ帳を閉じて生徒に手渡しながら、目を丸くして感心する。部下を褒める上司の人間関係も匂い、この二人、密かに何かしている。

「先生、あの車へ。さあ。まいりましょう」

白井はチラと私を見て、先に済まないね。とでも言いたげに、小さく口の端を引き上げる。彼にとつて満更でもない何かが達成されている。立ち上がると生徒に軽く会釈して、「はい。参りましょう」と、答えた。

「それじゃあ、若林先生、わたしはこれで」
彼はスタスタと一人で店の外へ歩いて行き、非常にスムーズに彼女が乗れと指示したりムジンに乗り込んでしまった。

私は突然のことで軽く放心し、ぼかんとそのリムジンのスモークガラスを眺め、その中に白井が乗り込んだことを夢の出来事のように実感できずにいた。

何だこれは。彼はこの生徒と何の関係を持っているのか。私の背後で、その深山という女生徒が尼僧からクッキーを買っていた。

「はは、いったいこれは。まるで自分から誘拐されるようだ」

私の後ろにいる女生徒に半ば独り言のように牽制的に発した言葉だが、反応したのは今の小声が聞こえもしない車内の白井だ。黒いスモークガラス越しにうつすらと彼の頭部が見える。微妙に上下している。笑っている。耳の形が明瞭なことから、こちらを見て笑っている。「そうです誘拐ですが、いいのです」と言っている様に見える。

渡されたクッキーの紙袋を子供らしい無垢な手でつまみ上げると、つま先でぐるりと回転して、まっすぐに戸口に向かって歩く。私の横を通り過ぎながら言った。

「お世話になりました、ご心配なく。と、今、白井から伝言がありました」

携帯端末で盗聴されたか。別れの言葉。私たちの側に決別するつもりだ。同行する女生徒のあの知能を持ってすれば何も困ることがないのだろう。既に何かで経済的成功を収めているらしく、リムジンなんか乗り回してやがる。

「なんでこいつ、私に嫌々」

車の扉を閉める刹那に聞こえてきた高校生らしい言葉。

そうか、白井は次の世界への離脱に成功したのだ。おそらくこの世界から移行する手立てとして、あの深山という女生徒の助力を取り付けたに違いない。白井も学者の端くれ、きつと止むに止めぬ学術的企てのうえで選んだろう。しかし、どうやら対等なというよりは、白井が依存する代償としてさうとうの妥協を強いられているようだ。以前告白されたのだが、彼は過去のトラウマから、女学生を少し怖がっている。「若い子は、みんな死体に見えるんですよ」なんて訳のわからない恐がり方を披露したことがある。さっきまで笑っていたが、今、深山が乗り込んだリムジンの中では、少し後悔を含んで緊張している事だろう。

今思えば、彼のその特性は、並々ならぬ不死へのこだわりを象徴したものだ。この特進高校の生徒観察事業

の目的は我々にも明かされておらず、教師達にとってもその話題はタブーなのだが、自分達の経歴を振り返ればすぐに答えに辿り着く。我々の共通の研究目的は「不死」への人体改革だ。それぞれの機関でそれにつながる研究を進めていた異端者達が、あたかも身の戒めとしてここを通過させられる。

「若林先生！伝え忘れました」

すこし困り顔の白井が顔を出す。私は耳に手を立てて「何を？」と構えた。

「申し訳ないのですが、次は先生が特選クラスの担任ですよ」

「え？」

「有意義な時を、過ごしてくださいね」

深山のような次の世界への鍵を手に入れる、と言う事か。だが、そもそもそのリムジンの行き先を、深山の真の目的を、白井本人はどこまで知っているのか。畏怖する相手を信じすぎても危険ではないか。まるで信仰が高じて俗世を捨て、出家しているようなものだ。もしくは空飛ぶ円盤が舞い降りて理想郷である星への移住を提案されるとか。現世を捨てて決断した先の全てを白紙で委任している。身ぐるみ剥がれたり人体実験されたりするのがおちだ。せつかくのチャンスを申し訳ないが、私にそのリスクを飲むつもりはなく、厄介な仕事を押し付けられただけ。

「わかった。まかせろ」と手で合図して、白井を見送った。

ともあれ彼がそのまま暢気に生き続ける事を願う。

それを羨ましく思う。何故なら、不死の世界が訪れる前に、私には為さねばならぬ厳しい使命がすでに明確にあるのだ。が、それを為すにはまだ時が浅い。やるとなると大きなリスクを伴うだろうから、今はなるべく安

穩としていたかった。

あの物理の教師とはそれきり会わなかった。職場でも多少の混乱を生じたが、その波が収まってみると、彼はいつの間にか退職の手続きを済ませていた。姿を消した当日に退職願を出していたという。あの日の尼僧珈琲はささやかな送別会であったのか、彼なりの別れの儀式であったのだろうか。それにあの女生徒も、その当日に退職手続きを取っている。様々な調整が講じられており、二人の姿が消えてしまったのにもかかわらず、社会的には何の問題も生じない日常の出来事となっている。そしてしばらくして、特選クラスの担当観察任務（担任）を命じられた。

修道院喫茶はその後すぐに募金箱を開け、外壁の穴をふさぎ建物全体を白く塗装したのだが、私一人では入る理由もない。

37 / 18

疑似バクテリア

腐敗を克服した現在、刺身でも生肉でも二日前の冷や飯でも、真夏に30度にもなる室温においても、腐敗の心配がない。今やそういう常識になっている。非常に効果の高い防腐剤が開発されたためだ。多くの食品の品質表示覧に「腐敗防止体（防腐剤）」と表記されている新しい物体の仕業だ。

私の防腐剤の研究についての学位論文に、世界中の営利公共あらゆるジャンルの組織がその利用権について問い合わせてきた。そのイタリアとドイツの合併企業の手紙は特に能弁で、私の信頼を勝ち取るに足るものであった。分厚い法的誓約書のコピーと共に、その会社の誠意として会長自らの手紙が添えられていた。しかもタイプではなく、高級なりネン紙に「肉筆」で書かれたもので、研究者を最優先で保護する態度を示した紳士的な手紙だ。

西洋カリグラフィの粋を凝らしたイタリックの優雅なライン、様式としてはカッパープレート体の少し前、

ヒューマニスト体後期の格式高いもの。そんな芸術的演出の元になされた魅力的な提案であった。私のバクテリア領域の研究を買い取った上で、高級研究員として雇用もし、雇用環境の無条件許諾もし、その中にはフランスのリゾート地に建つ高級住宅の提供という項目も保証書付きで提示されている。絶対に他社に渡さないという意志の表明の仕方は皆同じだったが、この企業のもとは最高額であった。私の才能を活用できるところはこの会社において他にないだろうと確信した。

と言うのが数年前のことであった。

今の私はその急転回に呆然自失の状態。研究成果はすべて奪われてしまし、金もほとんど奪われ、気がつけば収入を得る為に高校の物理教師になっていた。

なにせよ、この時点ではつきりしてる新しい事実は、肉筆には力ありという結論。この私を騙せたのだ。あの企業に裏切られ、全てを奪われた私はこの事実を負い目ではなく、大金を投じて得た真理として立ち向かうのだ。でなければ、怒りで爆発しそうになる。八つ当たりで人類を滅亡させてやりたくなる程だ。

ああ、思い出したくはなくとも、週に一度は何かの切っ掛けでその栄華を極めた華やかなりし時代を思い出し、その後の理不尽な破綻に身悶えするのだった。このメンタルダメージの循環をさっさと断ち切りたいが故に、まだ高校生である深山真希の計画に盲目的に従ってしまったている。

「理学部大学院の所属は生物物理学博士課程で、研究テーマは腐敗の基礎物理的解釈だ。」

「腐敗とは、生体の活動により特殊な均衡を保たれていた様々な化学反応が制御を失い、一般的な反応の集合に戻る。生命とは燃焼の一形態であると言われるが、人類が火を制御して文明を進めてきたその過程で、

様々な種類の火炎を次々と制御下においてきた。プラズマ、火薬、核分裂、核融合、と、炎の勢いはどんどん激しくなつてゆくね」

「：エネルギーの可塑性な状態。炎は一種の粘土造形であり、柔らかく暖色系に伝播しつつ分離したヌルヌルした滑らかな手触りと香り」

「時間はベツトリとギッシリとした粘土の中に閉じ込められると見つけられなくなり、粘土をスパツと切り裂くその断面にのみツブツブと不純物として現れ、カウントされる。粘土内時間が制御下におかれる領域はそのような偶然出会う点の羅列でしかないのだが、その偶然は回数を増やせば、連続し、ピキーンと制御された時間の流れが見えてくる。」

「ベトベトビトビトのその辺りに埋もれたお利口な等価理論をほじくり出した後は、高次元の処女膜状存在とその内部の粘性を覗き見し、11次元の抵抗の全くない超流体の中に浮いた時間の可塑性が人間界に現出されるように、神様にお願ひしたのさ。静かに誰にも邪魔をされずに衛星軌道の無人実験室で合成されて、それは何故か判らないがバクテリアの形をし、その小さくてぶよぶよした物体が燃焼に関わる多くを解決し、腐敗を制御し始めた。」

「化学変化全般を不活性にするのは簡単だ。有機物に限定するのも何とかなる。その定義困難な集合は生命の形態であり、それだけを分離選択するところが画期的で不可思議で面白い」

「いや、めん無責任で。実は判らない。イメージ出来ない」

「そして、それが不可解な事である証拠に、人類が生命ではないかと思っていた物が、生き物になっていたりする」
「例えばある種の人形に命が宿った。それは決まって猫の類なのだが、不思議な新興生命を持つてしまった。至極びつくりしたよ。黒猫の鏡や時計が生きているときの驚き。わかる？鳴きも食べも歩きもしないが、少し変形

しゅっくりと動き傷を治す」

「他にも、便利な例として、一度しつかりと研いで刃を付けた刃物は永久に切れ味を保つ。同じ鉄でも普通の状態であれば何の不思議もなく錆びたり摩耗したりするのだが、切れ味を一定以上高めると、生命の範疇に陥るらしく、永久化する」

「そんな新興的に生命化した無数の不可思議新現象も新たなテクノロジーとして活用してゆく事も出来るだろう」

「もともと科学の実証主義とは、実際の現象を盲目的に採用している事の連続に過ぎない。全ての現象はその根本のところを解明されておらず。冷めて言うなら、全ての科学的発見は、ただ見付けただけだ」

「そんな風にして私が半ば偶然に手に入れた「防腐体」については、食品保存に利用すれば大きな利益が得られるとして誰かが凄く儲けたらしいが、その過程で少しだけ慎重に安全策も検討された。か弱いバクテリア状であることから、すぐに熱分解できるはずだし、生体においては抗体によって排除される仕組みも組み込める」

「と、プレゼンテーションしてきたが、ここから先は追放されたので判らない。よく考えると非常に危険だな。あのバクテリア。私がやってた頃は熱分解出来なかつたしね」

深山真希のリムジンに乗ってから緊張して、さつきからずっと独り言を続けている。

「そもそも小さくて丸くてプヨプヨしてただけで、バクテリアじゃないしな」

「きつとあれだ。量子の振動範囲を拡大した物かも、9次元のさ、薄くつてさ、丸まってる」

「ウイルス的な強度を持つたら、風邪が流行するように不死が流行するんだねえ」

「遺伝子の外套膜カプシドを形成する何かと結びつくとしたら、何か、例えば、」

「少し大きな生物に食べられてだな、そいつらの器官となる」

「あいつらは全く変化しない。普通、分裂過程でいろんな変異や出来損ないが出てくるが、あれは均質。コピーの劣化という観念が存在しない」

「あたしね、白井先生。死なくなったら楽しいなって、思ってた」

隣のシートでクッキーをほおばりながら、深山真希がやると言葉を吐いた。

「君は死にたくない。普通はそうだ」

「そうじゃなくつて、人類全員がよ。善人も悪人もなく平等に、アフリカの難民で言われてる人まで。何にせよ死なくなったら、ほとんどの心配がなくなるらない？」

「そんなに単純かなあ？」

「複雑で些細なことを優先して、単純で重要なことを放棄するのは、気が付かないうちに、誰かに騙されているんじゃない？」

「誰に騙されてるかな？」

「得な人に決まってる。でも証明は不可能だし、それに気が付いていれば十分じゃない」

「不死は可能だし、中心年齢層の中では変革が始まっているかもな」

「そう？やっぱり？」そう言うと、肩に頭をもたせ掛けてきた。

「先生がやったの？これ」

若い美しい手の甲を目の前に掲げてその瑞々しい生物の永久活動を突きつけた。中心年齢層、つまり高校生の全てが変化の途上にあるのだろう。先に反応の早い者が突出しているが、影響は全体だ。あの「防腐体」を摂取しつづけて、ある確率で発現する。防腐体は体内で、人間用に改革されて全身に広がる。

「このクッキー自体には防腐体を混入した表記はないけど、判らないわよね。原材料の小麦とか、牛乳とか」

「そうだ。防腐体がね。僕もそう思う。いや、思うどころじゃなく、確信している」

「楽しんでるの？」

「楽しめると思うのか？非常に不愉快だ。僕が見つけたものを勝手に利用されてる。それどころか、人類の体はいつの間にか勝手にいじられてる。多分、僕も何らかの影響下にあるだろう。防腐体なんて明らかに危険じゃないか。生体に直接物理的効果を発揮するんだから。なのに今じゃ修道女が作るクッキーにまで混入されているんだからな。誰か意図的にやつてる。お節介してるんだよ」

「遠回しだけど、あたしは先生に改良されたのね」

「不本意だつてば。まあ、しかし、有益と断定して変化を受け入れる必要があるな。君は改良され、高知能化した。多分私を凌駕して判断を進めているのだろうね。君の目を見れば達観を表明していることが伝わるよ。さて、どんな結論を持つているんだい？この車は何処に向かう？僕を殺すの？復讐か？」

昔はこの列島を多くの台風が通過し、雨期があり、湿度に富んだ山林に覆われ、平野には大きな穀倉地帯があった。今や気候の変動の為、近海から吹く海風に含まれた水分を落とされるだけで、地球規模の湿度の波からは外れてしまった。リムジンは夕日を浴びつつ、砂漠化したかつての山々を縫うように走る。人口増加で真水が足りなくなっているこの時代に不死とは。果たして幸か不幸か、何が訪れるかまるで見当が付かない。

「殺すつて？先生はあたし達を置いて去ろうと、そんなことが出来ると思っているの？」

達観を示す聡明な態度を気取っているが、口周りに大量のクッキーの粉が付着している。尼僧が作ったクッキーは白い粉が多めにまぶしてあると同時に、硬くて嚙り割るのに苦勞する。聡明ではあるが、まだ未熟。不死に向かうこの子達の時代は本当に今始まったばかりなのだ、子供だ。

「それに誤解しないで。先生と出会えたのはラッキーだわ。これからいろんな価値が崩壊するでしょう。例えば死という極を失えば、生という認識が消滅するかも知れない。その意味では終末の訪れとも言える。そんな貴重でデリケートな時期を過ごすパートナーとしたら、当事者の筆頭である先生は最高ね」

「いやいや、そうじゃない。僕は一種の被害者だよ」

「加害者の一種でもあるわ。人類滅亡の犯人とも言える先生と、この世界の変化を見極めるなんて、あらゆる意味で貴重。求罪や復讐も含めてだけど。どんな知的好奇心も及ばない、わたしの喜びね」

夕日を受けて瞳のハイライトが赤く輝く。まるでそこから私の眉間に照準を合わせたレーザー光線のように。

「そうすることで、先生自身の責任を果たしてくださらないかしら。私の両親の事業を少しアシストしたら大きな富の集中を受けて、この世界の変化を鳥瞰するには良い場所を手に入れることが出来たわ。この世界で一番の特等席ね。みんなも後から続いて改良されて来るでしょうから、いつまでも私達の場所は維持できないでしょうけど。それに先生だつて変わるわよ」

「そこに僕のおもちやは揃ってるのか？あのラポは本当に僕専用？」

「お店で見せたとおり、何でも買つてあげる。これで本当の加害者を見つけられるでしょ」

「ありがとう。従おう。しかし、誤解の可能性があるので、あらかじめ言っとくけど、僕の好みは成人した成熟した女性だ。出来れば28歳以上」

もう少しだが成熟した女性ではないその女子高生は、肩にもたせていた頭をゆつくり上げて、真横から僕の顔

をじつと見て言った。

「そんなの平気だよ。わたしだってもう少しは成長する。それに、先生は変わる。それもあたしの重要なテーマだわ」

ボフツと、隣のシートに勢いよく後頭部から身を沈めると、セーラー服から舞い上がったホコリが窓から差し込む夕日にキラキラと輝いた。

「ふふ、先生。死にたくても死ねないわよ」

九相図絵巻でその主人公は、執着の戒めとして、妻の腐乱する様を耐え難い苦痛として見せつけられる。同じように、最愛の人の死に接し、最先端の科学を駆使して摂理にあらがおうと執着した私は、その戒めとしてこれから何を見せられるのであろうか。

私の予測では、防腐体の食物への導入は、大幅な延年齢化につながる。いずれ本当に不死の世が来る。「腐らせたいけない」と執着した私に与えられた結論が、これほど極端な異変に結実しようとは。

目を強く閉じる。狂わずにいられるか自信がない。あの時も社会と乖離していた。

清佳はこの深山という女生徒の年齢よりは長く生きたか。

二〇年前の十一月だ。

清佳は学校で倒れてからすぐに病院に搬送されたが、検査の結果は何処にも異常が見られない。癲癇でも貧血でも脳腫瘍でもない。結局急性心不全あたりで診断は行き詰まり、若く元々健康だし、すでに意識が回復し

て歩けるとのことで帰宅を許された。そして、付き添いの僕がそのまま様子を見ることになったのだ。清佳とは国営大学院大学特級修士生として同じ学部で研究し、数年前から同棲していた。

病院から部屋に帰り着いたのは夕方。大学の研究生に優先居住権が与えられる国営集合住宅のアルデコ調の展望式エレベーターを夕日に照らされつつ7階まで上昇し、赤絨毯の廊下の先、高純度アルミ製の扉の一つが二人共同の書斎兼住居。僕が床に布団を延べる間、清佳はパジャマに着替える。

二人で鯛フレークをふりかけた粥を食べた。異常繁殖した鯛は鯖よりも安価、などとバナナの高価だった時代の話などもして、とりあえず休んでいろと就寝を促して席を立った。僕は論文の整理があるので多少忙しく、書類資料に埋もれた机に身を沈める。とはいえワンルームなので清佳の動きは目の端に感じている。助言の通り今日は休むと決めている彼女は、しばらくの間7階の窓から暮れゆく町を静かに眺めていたが、「なほこうずに早寝しておきます」と妙な古語調で宣言して、うへへと老人のまねをしつつ、シーツを取り替えたばかりの布団の中にその身を潜り込ませたのだった。

清佳も僕もこの床に引き延べる古具「布団」というものを愛している。置きっぱなしのベットに比べて手間はかかるが、手を伸ばせば滑らかなフロアーに触れる事が出来、そこが既に清潔である事を実感する。部屋の隅々まで清らかに保たれていなければこの寝具は使用できない。勤勉な理性的な者が住んでいる証として利用し続けている。

「気分が治るまで、ここで寝てた方がいいね。それとも明日、実家に送ろうか？」

「いいえ」

布団に顔を埋めて、力なく答えた。

しばらく集中して気が付くと時計の針は5時間分も移動していた。今日はぼちぼち寝るかと思佳を振り返ると暗くした部屋の中、布団に顔を半分出したまま寝ているように見える。彼女を起こさないように新たな布団を用意しなければと手順を考えながら、最後の資料のページを捲りながらのPC画面に向き直って僕はふと違和感を覚えた。何かおかしい。暗い布団のシルエットの残像が妙に網膜に残り、胸騒ぎがする。

僕は捲書の手を止めた。机を立てて布団の横にかがみ込み、じつと、横長の人蔭を見つめる。この中に生き物がいて、しっかりとその内容積にその命を満たしているのかどうか、不在であったらどうしようか。幼い頃、その不安に駆られるように糞虫の糞を掴んで、中に動きを触感するのを繰り返していた。そして何度かに一度、中に何も無い糞を掴んでしまうのだ。

動いていない。呼吸の上下がない。気のせいか、でもやはり微動だにしない。

「清佳？」

声をかけたが、返事はない。

「清佳！」

布団をめくると、薄目を開けたまま停止して、冷たくなった清佳が居た。蘇生術を施しながら、僕の心は地獄の底に向かつて落下していった。何処にも足がかりのない穴を落ち続ける。何の手立てもない手遅れの状態と科学的見識が落ちる先の穴を掘り下げて行く。

すぐに仰向けにして心臓マッサージにかかる。蘇生術の手順通り心臓マッサージと人工呼吸を繰り返す。清佳の唇は完全に体温を失い、冷蔵庫から出した食材のようであった。既に死後硬直は解けかけ、薄く開けられていた眼球は少し乾燥している。いつ心臓が止まったか、推理するに、もう数時間前なのではないか、机から振り返って確かめていた清佳の顔は薄目を開けて僕を見ていた。その姿勢がいつから続いていたか記憶がない。

すでに蘇生作業が虚しいほど完全に死亡している。若年性の急性心臓麻痺。携帯端末を叩き、救急車を呼んだ。すぐに蘇生作業に戻る。なかなか救急車は到着せず、もう20分は連続して蘇生作業を続けている。しかし何の変化もない。救急隊員が装備する細動除去装置を待ちながらも、絶望感に気を失いそうになりながら蘇生を続けた。サイレンが遠くから鳴り始め、音の強弱がもどかしく町の地図をなぞり、派手な赤色灯を20も30も回しながら少しずつ近づいてくる。

「こちらです！はやく、早く蘇生術を」

その後の処置は急いで行われたが、形式的な、どことなく儀式に近い絶望感の中で行われた。

「心肺停止、体温も低いです」

救急隊員の表情が弔意を表している。僕は力なく頷いた。

「死亡確認。2時35分。よろしいですね」

隊員は病院に搬送中途切れなく蘇生作業を続けてくれた。もはや清佳はこの世のものではないと気づきながら。しかし僕はどんなに難しくとも、例えばこの場で新たな医療技術を発見しても、きつと何か手だてがあり蘇生の可能性がある、病院の救急搬送口のステンレス製の扉に隔てられた後も、何か手立てはないかと思案するのであった。

僕から引き離された清佳は、しばらくして死亡確認の手続きを受け、地下の安置室に運ばれていった。僕の前に看護師二人が現れ、深く礼をしてくれた。

「お亡くなりになりました」

「ご心痛の所恐縮ですが、よろしいですか？ご協力くださいませか？」

「もう一度お名前を確認したいのですが、市ノ瀬清佳さん？、でよろしいですね？はい」薄い書類に書き込まれて行く清佳の名前

「救急通報なされたのはあなたですね？はい。お名前は？」身分証を提示、

「昨日の？病院？には付き添われたのですか？」

一つ一つ力なく頷き、一つ頷く度に一つずつ希望が消去されて行き、徐々に僕の中のモードが変わっていった。それは極めて合理主義的な切り替えともいえる妥協であった。「そんなにびくびくとしなくても僕は科学者だ、それは判断できる。命は諦めてやる。だが、だが清佳の形はまだある。せめてそれだけは守る」と。僕の無表情な顔の裏側の心の内壁に向かって地たんだを踏みつつ怒鳴り散らした。だが、命を諦めるなどと大きな妥協をしたにもかかわらず、おそらく遺体の永久保存を望むのはこの場所に僕一人だ。誰にも協力は望めない

病院の扉を開け仰ぎ見た青空には層雲が長く引かれ、秋も終わる頃。室内よりは外気温が低く、霊安室から出て腐敗と戦う僕らには適している気候だ。

「清佳よかつたな、空気が冷たくて」

これが真夏であればスーパで買った新鮮な刺身でさえ持ち帰れるか怪しい。暖かい部屋で進行する腐敗から逃れるため、清佳を車椅子に乗せ、病院を出るところだ。病院の中庭から駐車場を横切り、隣接する車寄せに出て見舞客目当てのタクシーに声をかけた。清佳を抱き上げて乗り込もうとすると親切な運転手の介助をうける。力なく垂れた清佳の脚を車内に押し込んでくれた。車椅子をトランクに入れてもらっている間、僕は後部座席でしっかりと清佳を抱きかかえ、運転手が戻るとすぐに二人で通っていた大学へと行き先を告げた。あそこには大きな冷蔵庫がある。

きな冷蔵庫がある。

だが運転手はなかなか発進しない。ルームミラー越しに、怪訝な顔でこちらを見ている。清佳の顔色が白いからといって、死んでいるとは限らないだろう。そう怒鳴ろうとしたとき、タクシーのサイドミラーに人の群れが映った。数人の男たちが走ってくる。そして駐車場から植え込みの低木樹を飛び越えて病院のセキュリティと医者と清佳の父親が駆け出てきた。

「お客さん、」

エンジンを止めた運転手が振り返り、僕らと、待てと叫びながら駆け込んでくる人々を交互に見て、問うた。

「その女の人。まさか、ご遺体じゃ？」

45 / 17

不死証明事件

「あつ、また大きくなったなあ近頃の高校生」
この斉藤という数学教師は、急性巨人症の生徒を極端に怖がる。窓の外を動く細長い頭を指差して眉をひそめた。

「今度の転校生もさうとう大きいそうじゃないですか。若林先生の特選クラスだったら彼も馴染みそうですけど、どうですか」

廊下の高窓にも清掃活動を行う長身生徒の頭部が移動している。

「う、うちのクラスについて教頭には言われてるんですが、変更して特選クラスに。お願いできませんかねえ」
この男はもともと小心で有名なのだが、最近は一ツ雑味が加わって、小心にして凶々しくなってきた。

「特選クラスっておっしゃいますが、いまや学校全体がかつての特選級学力でしょうし、そんな旧弊管理は無意味でしょうに。それにね斉藤先生。長身化もすぐに一般化しますよ」

長身化も高知能化した者から進んでおり、私の特選クラス全員が2メートル越え。

「なので、斉藤先生が危惧していらっしやるような支障は存在しませんよ。皆知能が高く学習意欲が旺盛ですし。齋藤先生のところは先月大学に途中進学して一人欠員があつたでしょう。員数的判断ですから、仕方ないんじゃないですか？」

「う、受け入れると、」

この齋藤という教師は比較的長身の部類であるが、それが故にか、特に身長差に警戒感を持つ性向があつた。子供達は自分よりも背が低いという常識に捕われている為に、生徒大型化の順応に苦勞しているのだ。

そんな訳で、事前に非常に長身であると聞かされている転校生をどうしても受け入れたくないらしい。

「教頭の指示どおり、齋藤先生が受け入れて下さい。身長はあつても皆柔和でいい子たちでしょう。彼もきつとそうですよ」

「こわいんです。先生もそうでしょうに」

「私は怖くないです」

「いやいや、怖いでしょう。見下ろされるあの感覚」

顔色が青く変化してくる。血の気が引くのを目の当たりにして確信する。この病的な恐怖は確かに生徒の指導に支障を来す事だろう。

「彼らに囲まれた時の絶望感。眼球も大きい。歯も」

まあまあと、手で制して差別的偏見に繋がりがかねない発言を止め、説得を諦めた。

「いいでしょう。私のクラスに受け入れましょう」

「いやあ、ありがたいです。すぐに教頭に伝えますね。今日一杯どうです。奢りますよ」

恐怖とはこうも人を支配するのか。本当に怖かつたのだろう。齋藤の情けなくも安堵に満ちた顔を眺めるにつけ人類はまだまだ成長しなければならぬと痛感するのであつた。

「それじゃあ斉藤先生、寿司で」

「はいはいもちろんです」

斉藤は手モミをしつつ席を立ち、転校生の受け入れ先を変更するため教頭のデスクに私を導いた。この男と教頭の癒着は明白で、恐怖と管理が小心な点で一致しており、この二人の特選クラスに対する態度はどうにも不愉快。劣等感と警戒感で化け物扱いだ。

そもそも高知能化した生徒は驚異的に知能が向上し、高校レベルの授業など無意味だ。

「い、いやー参つた。今日は授業のネタがありませんよ。何とか反応情報を引き出さなきゃならないのに」

教室に向かう廊下で音声レコーダーのスイッチを確認しながら青い顔を向ける斉藤。

「あの大きな眼球で見られるとき、感じませんか、これを見透かされてるような、」

胸ポケットに入れた特殊生徒観察記録用の装置を指さして言う。

「授業中、とつても居心地の悪い感覚なんです」

「そうですか、私は特に感じませんが」

少し神経過敏の斉藤は、秘匿義務違反に抵触しかねない話題を振る事が多くなってきた。確かに異常天才生徒の目には、聡明な理知と共に隠せぬ達観がある。特進高校と称して研究資料集めをしている鬼畜のごとき我々の立場も、その高知能によって感付かれているに違いない。と思わせる眼差しを涼やかに向けるのだ。

「変異する生徒こそ病理的恐怖や社会齟齬に自覚的ですから、特にそれを汲み取って接しなければ。例えば学力テストなんかは屈辱的だと拒否されますが、理解できます。暢気でいられるのは私達ですよ。何にも教え

ることなんかありませんしね。もっと楽に接したらいいかです」

タブーに接近したことを理解した斉藤は、頬に小さな痙攣を生じさせながらニツコリと大きな作り笑いをしてみせた。私の背後から接近する大きな影に対して、同じように変な微笑みを与えて、くるりと背を向けて立ち去った。その大きな影は特選クラスの副級長。医学系の進路を希望する者で、既に大検を通過している。

「先生。僕の論文が米国科学アカデミージャーナルに掲載されたので、講演のため明日渡米しなくてはなりません。東京大学医科学研究所の方とまいります。この方は先生のお知り合いですか？」

「それは大変な快挙だね。医科研の彼は水腫学の応用で君の論文の基礎となる成果を持っている。君への学問的刺激にはいい相手だと思った。それに査読を経て掲載に至るには彼の助力が必要だっただろう」

「いえ、お手を煩わさずに済みました」

科学論文を学術雑誌に載せるとなると高度の研究結果と厳しい審査にかけられる。さすがに天才高校生ごときがこなせるわけはないと思っただが、あっさり独力でこなしたという。

「すぐに君達が学問の場を席卷するだろうね。私達もその後に追いつくだろうか。私の知能も向上してさ」

「間違いなくそうなりますよ。いずれ全人類が変化すると思います。でも先生は既に3つも博士号をお持ちだし、僕の目標ですよ」

毎日、浮世離れた討議で特選クラスの教室は満たされている。ほとんどは外国語である。数学言語やマシン語でも会話しているようだ。これがこの特選クラス特有の授業風景であり、生徒からの提案で出来た形式だそう。討議でお互いの専門分野を共有し合う学習形態。修学時間一杯に彼らの情報交換は続き、教師の立場は非力な管理者に墮している。

「今月の単位取得退校者は3人か。次の大検の申し込みは明日からだ。書類が必要な者は早めに申告する事」皆席に付き、私を静かに見下ろしている。この全員が私に注目するときに、確かに、あの齋藤が言う恐怖に通ずる感情を覚える。

そして、教頭が扉をノックし、今朝斉藤が私に押し付けた転校生を教室に招き入れる。

「転校生を紹介する。彼はイタリアから来たコンテ・ズビグニール君。日本に来てまず同年代の君達とコミュニケーションをとりたいという事で、この学校に入学した」

「よろしく。私のことはご存じですか。ローマ大学で博士号を貰いました」

コンテ・ズビグニール博士の登場直後に、何かが高速で伝播するのを感じた。彼の名と大学名で演繹すべき情報が整うらしい。

「私達は死なくなつた」

不死、生徒達はすでにこの生物史上最も特殊な事態の存在をコンテの名と共に把握していた。

「過剰成長は不死を受け入れる為の助走です。既に私達は死ねない肉体に乗り換えてしまった」

コンテ青年を紹介した流れのまま、複雑な講義が始まった。どうやら不死について確信が得られたというのだ。その進行が一番顕著なのが日本だという。

「皆で確認の調査をする必要がある。協力して頂きたい」

コンテの提案は我が生徒達に友愛と尊敬のこもった歓迎の言葉で受け入れられた。

級長格の生徒が私に結論を伝える。

「先生。僕達はこれから数日にわたって重大な問題を討議して行きますが、先生には討議の許可と管理をお願い

いたします。僕達を理解してくださいる先生だからこそお願いするのです」

コンテ博士の詳細な情報は私の手元がないが、この特選クラスの新世代人間達の何かを代表している貫禄がある。ああ、ついにこの事態が来たかと、気を失いそうになる。

「私に君たちの問題は手に余ると思うよ。しかし、討議の必要があるのならこの場所を利用するといい。協力しよう。しかし、その前に、コンテ君。君の素性を私に提供すべきだ。昼食後、準備室の私のデスクに来なさい」

「わかりました。伺います」

許可を出した直後から討議が始まった。不死の証明と言うが、難しいだろう。高能化した者は不死の体だそうだが、若い彼らに、そもそも死の可能性は低く、実証例を見つけるのは困難だ。高能化していること自体が死を上手く回避する達人とも言える。

噂どおりひとときわ長身だ。260センチ

「まずは1986年の発癌ウイルスでノーベル賞を受賞したレナート・ダルベツコ博士が、正常なヒトDNAの塩基配列の決定は癌研究に大きな恵みをもたらすと論じ、その結果公的資金による国際的計画ヒトゲノム解明プロジェクトが開始された。その後1990年代に民間の参入を迎えて飛躍的に解明が進み、現在のトランスジェニックヒューマンの開発につながった。HCの合目的化された情報網にその結論が大いに作用し、癌の克服と連携して、その最終的な操作を行ったに違いないと思うのだ」

まだ噂に過ぎないHCの存在を確信し理解している。コンテはこの高校が持つ機能を理解し、ここに来て最後の結論を加速的に手に入れるつもりだ。しかし、他の生徒もすでに同調を果たしており、何かの計画が始動されてからの長い時間を感じる。彼らの生体観察をしていたのは我々だが、それを凌駕する目的を持って彼らに利用されていたのも我々かも知れない。さらに、HCの名を聞いたとき、私の緊張は実質的な警戒へと代わった。

「癌の克服と不死のつながりはイメージできるけど、そのほかの身体改革については具体的にどんな繋がりが見えますか？」

「いくつかあります。まずは防腐技術ですね。劣化を封印するホルモン。それを作用させるための細胞建築。柱や窓や釘に至るまで細かくリフォームし。古代エジプトのピラミッドのように防腐のための宮を作っている。そして防腐の前に感受性のコントロールも重要でした。多くのアレルギー疾患に対応するためや、薬化学工程の促進技術として十分発達していた。それらを駆使して行われた証拠が我々の体に表れているのです。まずその改革の手段として、ヒト細胞を作り替える行程の先鋒は、受容器官に辿り着きます。細胞の外側からシグナルによって反応し様々な代謝を行う器官です。細胞膜表面に無数に設置された受容器と、細胞質応答器に何らかのシグナル物質を与える。リガンドと呼ばれる受容器結合物質によってまず受容器のゲートが開き大きな情報の固まりであろう人体改造因子を細胞内に取り込む。細胞の中に入り込むにはその大きさが重要で、大型および極性のあるリガンドはリン脂質二重層の細胞膜を通過できないが、小分子あるいは非極性リガンドは、浸透して通過し細胞内へ到達できる。まずはそれを鍵穴として用い、本体が入り込む大門を開ける。例えば、コルチゾールのような小さな分子は細胞膜をも透過し細胞質内部のコルチゾール受容器に直接結合してシャペロンを分離させてより小型化しさらに内部へ、核質への透過を可能にする。内側から誰かが扉を開けない限り入れない。目的は「不死」の伝達なのだが、それを届けるだけでも様々な改変が必要で、副作用を生じるのだね。

受容器のゲートについては以上の通り。そこで、癌克服や防腐などの名を借りた人改造因子だが、我々の体の構造を改革するなど、元々完成の域にあるシンプルなシステムの破壊に等しい。その手順情報は膨大で、それを伝えるホルモンの形状も巨大化するだろう。よって様々な部位に対して道を広げるような無理をせざるを得ない。細胞膜のゲートの開放の手順だけで、局所コンホメーションとその他の対立ホルモンの阻害のためのイン

ヒビターを駆使し、更には植物細胞に特有な細胞壁間連絡通路に用いられるデスモ小管など細胞間コネクソンを増築し利用する。その課程で副作用として様々な作用が起こる。イオンチャンネルのゲートが広げられナトリウムイオン、カリウムイオン、カルシウムイオン、塩基イオン。更には光、音波、電位、ホルモン、そして神経伝達物質の交換が爆発的に活性化するので。僕達の高能化はそのためだ」

高知能の種明かしをして、謙遜する。そんな目と、両手を広げるゼスチャーをした。

「しかし、HCの設計は大したものだ。多少は外観の変容を許してしまったが、多くは非常に生活に有効な形で副作用を生じ、改変を是とする民意の獲得を目前にしている」

校庭ではサッカーボールを神業のように足先で操る体育会系の高能化生徒がいる。7つのボールで同時リフティング。

「さて、ゲノムの取得は人類の手で行ったが、そこから先、まだまだ必要な情報は限りなくある。プロテオームの複雑な構造やその作用、DNAが生み出すエフェクトの解明。そのあたりから人間の手を離れたのだろう。HCはその分野を高速で解明し、そして、その複雑な構造を理解して、結論を得た。その一つとして、我々の理解を待つことをやめた。新しい言語と学種と優秀な研究者を養成し何世紀もかけて成熟を待つ事と、理解を待たずその結論だけ提示するのでは、無駄な時間があるかないか。処置される我々からみれば短絡のようかどうかね」

最近よく耳にする噂。HCと言う名前。あるところでは人類の敵として、しかしあるところでは神として、その最終型計算機を呼んでいる。実は、私にとって地球上の誰よりも縁の深い名だ。

HCは確かにこの人体変革に大きな影響を与えている、それ故に開発者の私は失脚し此処にいる。それを見抜いてここに来たのか。私が目当てか。討議の内容は一言も聞き漏らすことが出来ない。

「だが、優位なものからみればマテリアルにすぎないところを、うまく判断基準がヒューマニズム化されているのも興味深いね。量子計算機と脳神経網計算機の開発競争の中、後者が今のHC世代といわれている。どこか生物相のコンセンサスを獲得している」

「高みから見下ろすものがすべて良心を持つとは限らない。蟻やゴキブリに対する人間の態度をみればわかるだろう。良心と知能とは別のものだ。ヒトは神の身体を模して作られたというのが、キリスト教の人間創造の原理だが、HCといわれる最終計算機は人間の脳を模して作られた。その生まれの素養がマクロに作用しているのか、HCには生物相に対する愛着、生物に対してパーフェクトな良心を追求する原理があるように見える」

「僕は自身の身体の変化に気がつき、様々な実験的観察によって得られた情報を演繹して、不死を狙った外因的改変と結論したのだが、次に、いかに不死を得るかせつめいしよう。この不死に至るプロジェクトは、癌遺伝子の解明と腫瘍学による、癌克服の歪曲した結論として、結果的に不死となったに過ぎない、とさつき説明したが、まさしくその内容は癌との戦いだ。人類自身がこのままHCの手を借りずに癌に対応し続けていたとしても、同じ結論に至ったであろう。」

まずは遺伝子の究極の保護である。これまで発見されている癌抑制遺伝子は二つ対になっており、二つとも破壊されたときようやく癌化が始まる。癌抑制遺伝子と癌化促進遺伝子との綱引きが解き放たれてしまうためだ。我々の染色体が大型化しているのは二つの癌抑制遺伝子を修復する循環を得るために、多数の新器官を設置したためだ。その複雑で永遠のようなフラクタル構造が、いかに完全無欠の修復力を持つのか、は僕には理解できない。たぶん生物学レベルの技術ではなく、遺伝子を、ボーアの量子論的原子構造のレベルで制御している。核力で結びついている陽子と中性子の構造に加速器で粒子を打ち込むと、いずれかの粒子が大きくなり不安定化して、楕円型、洋なし型と様々な形に原子核が巨大変形する。本来の形からの逸脱が小さな菌車としてこ

れまでにない確かな構造を分子レベルに与えている。例えば、我々新世代の神経伝達物質の多くがクーパー対を持つているようだ。つまり超伝導を内包してしまっている。以前、熱振動によってしか成せないと思われていた核の融合が、結晶のささやかな微細亀裂によっても生じるように、大型サイクロトロン級の粒子打ち込みをバクテリア状の微細な者が果たしてしまった。そんな最新防衛技術の本性が僕たちの分子構造の改変を担当していると推理します」

「癌の話に戻ると、がん細胞の特徴として不死がある。がん細胞は不死である。その部分を我々は奪い取り克服したのだが、奇しくもこちらが不死となってしまうのだ。アポトーシスというプログラム上の細胞死、アポトーシスこそ癌抑制遺伝子の要で、これが阻害されることで癌細胞は増殖を継続し細胞分裂が止まらなくなる」

「細胞を殺すことが本体の延命につながる。皮肉な状態だ。しかし、このアポトーシス。我々の身体を彫刻するためのツールとしても一般的で、人体の形を粘土や木を使って造形する彫刻家のように、いろいろな部分を削り取り、形を作り、維持もする。例えば、胎児の形成、生後二ヶ月の頃、胎児の手には水かき状の膜がある。これを人間として形を形成する過程で、アポトーシスが働き手指の間の膜が死滅し取り除かれる。そしてこのような五指が離れて棒状の指が形成される。アポトーシスは形態形成というパターン形状を彫刻する機能の代表的なものだ。そしてその形態形成は分子の性質から細胞レベル、身体レベル、果ては種の構成や地球環境に及ぶレベルまで、各階層に発現する」

「物理的な改変が生じて空間が影響を受けている。時間の構造に手が加えられ、肉体を構成する物質の時間にアポトーシスの原理が動いているのだ」

それから小一時間かけて既に証明された身体改変上の物理現象と、その外側の予測を講義した。コンテ自身が予測した多くの説の証明を試みている。だが、最終的な結論は不明だという。

「このように未知の原理や定理が多用され、人類未踏のデータベースを要としていて、手が出せない。人類の科学的情報累積から隔たれた先に突然なされた結論だから」

講義が一段落した休憩時間に尋ねてみた。

「基本的なことを聞いてもよろしいか？」

教卓に座る私を全員が見た。

「学校という行政サービスの目的は修学だが、既にこの高校の修学対応能力の外側に君たちがいるのも確かだ。その討議が終わった後、この高校にどんな必要性があるのかな？」

ゆつくりと級長格の生徒が答えた。

「混乱を与えてしまつて申し訳ありません。しかし、僕らの立場は他のクラスの友人と何ら変わりありませんよ。僕達は全員、高校入学時は平均的でした。その後徐々に変化してしまつた。今日転入されたコンテ君にしろ、ここに入学を許されて、先生方の善意の上に保護されている。僕らにとつて、高校生という未成年。ここが一番安全で、安定しているのです」

「未成年としても大学には入学できる。大学はどうだ。皆明日にでも容易に進学が出来るだろう。修学ではなく研究をするためにさ」

「僕らにとつて、修学機関としてはここも大学も変わらないと思いませんか」

答えた博士号を持つコンテの顔を見上げると、目に涙を浮かべている。

「ああ…わかるよ。最近はお私の中にも変化を感じる」

昼休みに生物学準備室の作業テーブルを挟んでコンテと向かい合う。

「不死の証明か。必要なのかい？危険なことをするんじゃないかと不安だ」

背後の標本棚の最上部と同じ高さ、フクロウと鷺の剥製の間から滑らかな声が響く。

「僕たちは先駆者です。後に続く全ての者が僕達に興味を持つ。僕達の体んです。昔ドイツにいたヨーゼフ・メンゲレ医師の好奇心と同じ。同じ人間だが答えが隠されているとなれば体を提供するのが公共的に当然と思われるでしょう。何せ全人類的な変化になるはずですから」

「メンゲレって？」

「ナチス政権下で双子の研究をした医者です」

コンテは、私の今の立場を知っていて、人類のヒステリックな好奇心が、いかに危険か論ずる。

「彼は双子に資料的な特質があると考えた。そして使命感の元、酷い実験を繰り返した。彼の助手は毎日のように町に繰り出し、人々が集まる市役所、駅、郵便局、などで「双子は居ませんか。研究に協力を」と呼びかけ、何千人もの双子を特別な研究所付属学校に収容した。そこは実験動物のケージと同じ。次々とそこから引き出されて実験に供された。実験のほとんどは学術的な根拠のない、適当な主観的な動機によっていて、極めて非人道的な姿勢で臨まれた。始めは身体測定による外形的検査が主体であったが、徐々にその盲目的な好奇心がエスカレートして行く、瞳の色を変更する為子供の目に薬物を注入してみるとか、様々な部位の切断による機能補完の観察。肢体や性器の交換など、数々の残酷的手術。背中合わせに縫い合わせ静脈を相互に繋いで人工のシヤム双生児を作ろうとし、失敗し、酷い感染症に陥らせ、あまりにも見るに堪えないその姿に手術から3日後、その被験者は両親に窒息死させられた」

昼食をもどしそうになったが、フクロウの目とにらみ合い気分を立て直した。

「そんな恐怖が実感としてあります。資料の集合としての標本と見られてしまう。また僕達は双子よりも危うい。人権は人に与えられる。人からはみ出しては危険なのです」

「人を凌駕した能力を先に手にすることが、先に人間から離れることに繋がるとは思えない。様々な分野に超能力したヒーローが居るじゃないか。それに、君は人から産まれた事実があるわけだから、そこは揺るがないと思うよ」

「そう法律的に全てを解釈できれば、犯罪は起こらないし戦争も起こらないし差別的偏見も実行力を持たない。しかし現実社会はもつと危険な野性味に溢れているでしょう。メンゲレは異常としてもエルンスト・クレッチマーに繋がるフランツ・ガール医師の骨相学があるように、学問の場にこそ人間の野性が表れるものです。その野性味の中から様々な挑戦がなされ文化は進歩している。僕らが倫理的後ろ盾を失ったらすぐに食いつかれてしまうでしょう。そしてまず、彼等には嫉妬という動機があります。僕達は学者達に嫉妬されます。彼等を駆逐する勢いで僕達は世の中に出て行くでしょうからね。いずれ近い将来には全人類が変化してしまうと思いますが、先駆者と後続者との間に時間的な幅が数十年と大きく取られると予測しています。まだしばらく僕達はマイノリティだ。その時間の幅に恐怖しているのです。例えば、第二次世界大戦は4年ほどの期間でしたが、莫大な人間が合法的に死にました」

「なるほど、君たちの安全を保証する為の倫理的な基盤を固めるのが急務だと、心配しているわけだね」

「そのために事態の解明と、安定的情報提供をしていきたいのです。なるべくスムーズに印象的なやり方で。そこで、不死の証明なのです」

「どうやって？」

「何とかしてそれを手に入れます。貴方たち全員もいずれ不死となるのだと。」

「そうか、そうだろうね。安心させるわけだね、いずれ君達と同じになると。しかし、もう一度聞くが、どうやって証明するんだ？」

「ご心配をかけて済みません。健康的危険を冒すと危惧しているのですね。在りし日のギロチン論争のように」「ギロチン？」

「フランスの化学者アントワーヌ・ラボアジエがギロチン処刑の人道性に疑問を呈し、自らをギロチンに掛けさせて、首が切り離された後に瞬きを16秒間したという。首だけで生きている時間があることを証明した。しかし、あれはたぶんフォークロアでしょう。1905年にボーリユー博士が死刑囚で行った実験を猟奇的に改変したものです。しかし、実はその後、正式にフランス議会の依頼によって1956年にセギュレ博士によって死刑囚による実験がなされ、瞳孔反応で検証した結果、なんと15分も反応が維持されたと言います。意識の有る無しは不明ですがね。何にせよ死刑囚の首ははねられた。死と認定されていた領域の為の作業はかくも教訓的になりがちです。そうやって少し非人道的な部分を織り込んで、実験自体の批判を誘う。ところが、その後、オランダの脳神経学者のグループがマウスの首を切断して同様の実験をしました。精密な脳波の測定が行われて、1分ほど脳波の活動が確認されていたと言います。人間の身をもって証明しなければならぬ決まりは無いのです。何か安全で合理的な方法を検討中ですよ」

「首を切られるマウスにも、些か感情移入してしまうがね、死と生の狭間に関わることは常に非人道性をはらんでしまうだろう。くれぐれも慎重に。君が至った論理的結論に自信があるのは判るが、方法論を見れば、取り返しが付く問題ではない。不死とは関係ないけど、フリードリヒ2世の言語実験を知っているか？」

「いえ、」

「フリードリヒ2世は交易都市パレルモで育った。そこでは日常的に様々な言語が飛び交い、言語文化の坩堝と化していた。そして王子をある実験衝動に至らしめた。人は自然には何語を話すのかと疑問を抱いたのだ。そして、産まれたばかりの子供を宮殿に集めて、家来には子供に一切話しかけるのを禁じ、無から自然として言葉話すのを待ちながら育てたところ、集められた全ての子供が死んでしまった。言語の問題を検証していたのに、子供にとってそれが命に関わるとは」

「す、全ての、こ、子供が死んだのですね。わかりました、未知の部分はその存在も未知だと。ご安心ください一切の人体実験を放棄します」

メンゲレの話のお返しにフリードリヒ2世の話をしてやった。コンテからは新人類を観察するというこの学校の本性への批判や牽制。それに対してこちらからは急進的行動への牽制。そのやり取りを寓話で暗喩しあったのだ。二人とも昼食をもどしそうになりながら、理科準備室を出た。

数日の間コンテを中心に議論が繰り返されている。朝から晩までだ。他の生徒がクラブ活動を終えて夜になって帰宅するのに合わせて、永遠と続いていた議論を閉じる。かなりのハードワークだ。私は管理者として時々彼等と時間をともにするだけだが、その短い時間でも脳がフル回転して疲弊する。生徒達はそれを察して、高度な議論を休止して日常的な会話に落としてくれたりもする。そこでいくらかは彼等の心を共有できる。なかでもコンテ博士は非常にデリケートな心の持ち主だ。この数日で彼の深い部分が十分に表現されて、私に彼の内部を理解させてくれた。

そして彼の内部が判るにつれて不安になった。何か急いでいる。紳士的な焦りを見せる。この数日にかけての集

中議論は、やはり実際に迫る何かから逃げる為か。

「若林先生、午後に教頭がお呼びですよ」

斉藤が昼食時間に話しかけてきた。

「教頭の話だと、数学オリンピックに彼等を出してはどうかと。我が校の対外成績に貢献できますからね」

「私だったら出しませんね」

憤慨して答えた。教頭の発案ではなく、どうせ数学教師たる斉藤の入れ知恵だろう。

生徒達が陥っている深刻な問題を対比させてみると、あまりにも幼稚なお遊びだ。

「まるで見せ物ですね。彼等はやらないでしょう。教頭の提案なんですか？」

席を立つて教頭のデスクに向かう。すると、斉藤も席を立つ。「教頭が提案した」という詐称した部分がばれる

のを防ごうと、ついてきた斉藤が背後に立つ。全くうっとうしい無礼な小心な野心家だ。

「教頭先生、私のクラスの生徒を数学オリンピックに、ですか？」

「どうかね若林先生。君なら説得できないかな。彼等の才能は我が校の財産だ」

「まず無理でしょう」

「しかし、彼等にも少しは高校生らしい目標に向かつてもらわないと。ねえ」

後ろに立つ斉藤に目配せ。

「高校生らしい、ですか。しかし、彼等には彼等なりの目標があると思いますし」

「数学オリンピックは国際的な権威でもあるし、とても有意義でしょう」

「学問で勝ち負けですか？論理学はスポーツとは違います。数学オリンピックなど、彼等には侮辱と感ぜられる

でしょう」

「まままま、先生。そこを何とか」

斉藤の大柄の体が横から割り込んできた。

「あ、斉藤先生、私の後ろに立つておられたのですか、ちょうど良い。先生は数学担当だし、教頭先生のご提案を、先生が直接彼等に説得してください。私、数学オリンピックは全くの門外漢なんで。それでは大検の手続きがありますのでこれで」

教頭と斉藤は顔を似合わせて、口をへの字に曲げた。

私がデスクに戻ろうとした時、生徒が一人慌てて入ってきた。

「先生！特選クラスの留學生がやばいです！校庭に出てみてください」

慌てて校庭に出てみると、4階校舎の窓から大柄の生徒が脚を引き抜くところであった。窓枠の外の薄い梁の段に脚をかけて今にも飛び降りようと言っているところ。

「飛び降りるつもりだ！あそこは生物室です！誰か向かって」

体育倉庫からクッションをと指示を発する前に、コンテは飛び降りた。

4階から飛び降り、足の前から堅い校庭の歩道上に落下した。大きな体がクシャツと垂直に潰れるのが見えた。砂埃をあげて四枝が大きくバウンドする。

「救急車！手配して！」。私自身の携帯端末でも救急を依頼する緊急ボタンを押した。傍らに駆け寄ると、コンテは意識があり、血を吐きながらこちらを見つめた。脚が異常に短くなっている。両足の大腿骨が股関節から脱臼し、骨盤を砕いて腹側内部に突き上がっている。内蔵は大きく損傷しているに違いない。しかし生きています。

教室の窓から特選クラス全員が顔を出してその事件を見下ろしていた。しかし、その生徒たちの顔は異常に穏やかで、どこか聖人や、天使のようであった。コンテの後に続く者はいないようだが、その平和すぎる表情には戦慄さえ覚える。

「先生、約束をまねなくて申し訳ありません。これから、この身を持って、不死を、証明します」
4階の生徒を凝視したまま硬直している私にコンテが優しくささやいた。彼を見るのが恐かった。大きく破損した体が痛々しすぎるためでもあるが、その表情が恐ろしい。

救急隊員がすぐに駆けつけた。彼は自ら救急に連絡をした後に飛び降りたのだ。

「痛みは、ひどく、あります。徐々に強くなってきました。たぶん耐えられると思います」
コンテの理性的な言葉にしっかりと痛みをこらえる感情が加わっている。その声によく我に返った私は彼の損傷を確認し始める。しかし、どうやってコンテの手当をすればいいのか、通常は死ぬほどの身体損壊である。手当どころの話じゃない。脚は半分の長さに押し縮められ筋肉が球状に腫れ上がり脇腹には大腿骨の棒状の膨らみがあり、干し鳥賊のように大きく腹を横に広げている。後頭部にも大きな裂傷があり頭蓋骨が割れ陥没骨折、脳挫傷。

背後に立つ救急隊員もようやく我に返って担架に乗せる手順を指示し始めた。ストレッチャーに乗せる前に頸部と脊椎を固定。腹側部に触れずに持ち上げる手はずとして着ていたシャツを切り開いて両脇からシャツをつかんで持ち上げ補定パネルを差し込んでようやくストレッチャーに乗せ上げた。激痛に顔をゆがめるコンテ。

「この、痛みは、先生に、捧げます。いたい、いたい！恐ろしくいたい！」

どこまでも強くなつてゆく痛みを恐怖を覚え、痙攣を起こし始めた。死に直面した重傷から起こる痙攣。

「先生、先日、話した、マウスの首、を、切つて、1分間生きていた話し。詳細があるんですが、痛い！！うう！」

目の焦点は合わず、意識が朦朧としてきた。

「首を切断して、うう！50秒後に、通常では見られないフラッシュのような大きな脳活動が見られる。はあうう！その特殊な脳波を、「死の波」と呼んでいるそうです。うう！僕ももうすぐ体験するのですね」

もはや理解できている。彼は先駆者達全員の安全の為に人間社会へ倫理的調整を取る目的で身を捧げ、この冒険をするつもりだ。

そして、私の目の前で意識を失つて心肺停止、これは失血によるものと脳の損傷によるものだ。

「私は彼の担任です。病院まで付き添います」

救急車の中で止血をし、何度か蘇生を試みる。しかし、その車中で蘇生は起こらず、救急病院のICUで完全に死亡した。

弱くではあるが心臓が動き始めたのは、大学病院に移送されてから。先に医学部に入學し飛び級で医師免許を取得していた元我が校特選クラス副級長による処置を受けてからであった。この大学病院への遺体移送処置は生物学教室から飛び降りる前から、あらかじめ計画されていたようだ。この一連の動きは多くのメディアで報道され、自殺と蘇生の課程が証言された。

病室に見舞いにゆく度、少しずつ回復している。あの元特選クラス医師が少しずつ器官を再建してくれている。正しい知識と技術と器具を用いて彼の体は少しずつ修復されてゆく。大人の余暇に少しずつ作られる帆船模型やジクソウパズルのようだ。

何かの手続きを経て行くように、あまり感動を伴わずに確かに不死の証明を成し遂げた。新しい種族の誕生

を宣言する大舞台として、身を挺して不死の証明を企て、世間にも大きく報道されたし、その彼等の身に起きた異変の紹介を同情的に成し遂げるのに成功した。

「この世界は甘くないですね。誤算でした。」

暗い表情のコンテは失望と共に告白した。手に入れた肯定的な社会の反応などは副次的な当然の事で、本当はもつと大きな目的があり、それを手に入れるべく画策した犠牲であった。

「せんせ。僕はあの有名すぎる凡庸な諺が好きです。攻撃は最大の防御つてやつ。先駆者であることで迫害されたり実験台にされたりする危機を逆転させ、あわよくば支配者となろうとしていたんですがね」

身を挺して提供した地獄の激痛はむなしく、新たに訪れた状況によって、その野心は打ち砕かれた。

「この大病院に先遣していた医者²の報告では、僕が入院してから2週間目あたりから、遺体蘇生が雪崩のごとく起こり始めたそうです」

先駆者と、それに続く全ての人間が高能化し不死となるのに、コンテ達が予想したよりもその時間差はないようだ。支配が成功するチャンスはないだろう。

私を含め、人々は徐々に巨大化している。成長期を過ぎた私の体も再び身長が伸び始めている。そして、巨大化を待たず不死が実現し始めている。病院のあちこちに異常な姿の患者が目立つ。大きすぎる損傷を抱えながら生きている。以前なら死んでいたような身体損傷。よくそれで生きているなど思われる衝撃的な状態だ。

病院の医師は、初めのうちは救命達成率の高さに素直に喜びを感じていた。医療技術修練と、患者の生存への執念、その相互努力の結晶。医者とは命を助ける花形職業の一つであった。しかし、今、救命という事態そ

のものが消失しつつある。医療の緊迫感は消え失せてしまった。これから、新しい医療理念が構築されて行くだろう。最短で蘇生し合理的に器官を再生させ、死なないが故に長く続く苦痛をいかに和らげるかなど。死から離れて清々しく活気を取り戻すだろう。

「このタクシーも改造しないといけませんね」

「まったくですねえ。申し訳ないです」

コンテの見舞いの帰り、後部シートに横になるように乗り込む。しかし運転手の方が巨大化が進んでいて、まるで幼児用の電動カーを運転しているような姿勢でハンドルを握っていた。

体が大型化するのには生物の進化のベクトルとして様々な場面に見受けられる。恐竜、鯨、ゾウ、キリン。単細胞の原生動物を出発点とすると、その体の大きさに見られる進化ベクトルの大型化方向は明白だ。しかし、この度の不死を伴う人類大型化は、単純な淘汰結果として大型化しているとは思えない、コンテが以前講釈してくれた、不死と繋げた論理が正鵠をえていそうだ。空間と時間の構成の問題だという。今は理解が出来ないが、私の変化もいい感じで進んでいる。

人間のさなき

9 / 23

1

この高校は辞職ラッシュとなった。半数の教師がここを去る。

「若林先生に辞められたら、僕がああクラス、た、担任じゃないですか」

辞職届けを受理され、泣き顔の斉藤を無視し、引き継ぎやロッカーの整理も何もかも放棄して、教頭の呆れ顔を背に職員室を出た。花壇の前には、まだコンテの血液の跡が残っている。身を挺したコンテによる不死証明の後、もはや私の為すべき事は時間との勝負だ、すぐに行動せねば間に合わない。

辞職する他の教師達と同様、私にも果さんと欲する宿命があり、それは不死が完全に成立する前に終えねばならない。そのタイミングは15年前に不死実現を願っていたその瞬間から見計ってはいた。

その十五年前、私は公的研究機関の首席研究員として、非常に大きな研究成果を得るのに成功した。思惑通り、それが人類社会全体に深い影響を及ぼすにいたる。私のしでかした科学界への反逆は根強く効力を維持し続けており、現職の研究員達がなんとか私の空けた大穴を埋めようと、悲しいかな未だ負け戦を戦っているという。いざれ私は、人類を禁治産者とさせた張本人、人類の主権を取り上げた裏切り者とされるだろう。

都心の雑居ビル街にこぢんまりと日本庭園を囲んで建つ情報機械研究所。施設の一角に設けられた私の新型計算機研究棟は、思いの外小さなものだった。旧来の並列処理型の大規模計算機となれば、本体と電源合わせて大型体育館を凌駕する巨大な施設となったわけだが、この画期的な装置は乗用車ほどの大きさ。宇宙波絶縁用に誂えた小降りのシールドドーム内に浮かぶその本体設備は。接続された数トンにも及ぶケーブル群に埋まるように、まるで何かの果実の種のように愛らしく震えていた。

コンピューター科学者として野心家だった私は、非ノイマン型コンピューター開発チームの異端的リーダーとして研究機関に身を置いて、急進的で独善的ではあったが、本当に人類を救うつもりで日夜心血を注いでいた。そして、人類叡智の全てを食い尽くす、言わば人類最後の発明に着手したのだった。

人の脳神経回路の仕組みをもとにした、自己学習開発型の究極のニューラルコンピューターの開発だ。論理的ブラックボックスを是とし「最終型神託機械」の実用性を証明する物で、非ノイマン型のようにプログラムを持たないことはもちろん、自らの物理的構造を含む全ての因子に於いて鳥瞰的な、一種の「場」や「空間」に近い装置だ。その変化し続けるであろう機械の体のスタートとして、空間の中に命を産むに足る環境を誂える。それは初期的には本体となるであろうが、いずれはその内部に構成された体が成長して、蛹の殻を脱ぐように何処かに飛び立つて行く。しかし、その蛹の構造も、究極のスペックを必要とする物であった。

Human Chrysalis「人間の蛹」略して「HC」と、苦勞してかき集めた大金を投ずるが故に大仰な名をつけられたその装置は、特殊な超多面体クリスタルの表面に構築された多積層分子ゲートによってナノレベルで調光分光されたレーザー光干渉によって浮かび上がる相極的多層構造のニューラルネットワークの固まりを、直径1メートルのクリスタル内に出現させる。この光子コンピューターはそもそも非常に効率的で、従来の電子伝達型の回路とはアウトプット処理能力の差が1000万倍もある。更に自立的な回路構成を瞬時に行えることもあり、常に最適なロジック回路を探り続け、高性能化し続ける。そんな究極的に高性能な大脳に、世界の科学工業ネットワークを接続して、巨大なデバイスを与えた事により、ハード面でも自立的最適化を繰り返し、開発者としての我々の手を離れた。

起動後に安定運転が成立してから後は、程なくして光子コンピューターでもない何かに置き換わって、その物

理的位置の追尾すら出来ない。ネットワークを開い込んで、その位置を特定しようと幾度も挑戦したが、まるでタマネギの種を探してタマネギをむいて行くような、水たまりの中で魚を探すような、存在の形質が見極められない以上はとらえ所がなく、見つからない。しかし、端末の上ではその台数が多数認められて、それぞれが公開された新しい計算システムとして有能と評価され、各機関で利用され始めてもいる。

圧倒的な能率と正しさをもって我々開発者を凌駕して、様々な分野で影響力を発揮していった。もはや取り返しが付かない状態であった。事態は制御できない危険な領域に達していたが、狂人として私が排除されたあと、怪物を解き放つてしまった責任を誰もが回避しようとした結果、その本質の公開はされず。まだ研究室内にあるとして、その後も「HC」と呼び習わされている。研究機関は何も失敗はしていない事になっている。私も体よく特進高校の教師にされた。

人類から奢りの最先端部分である「叡智」を奪い取る。神に叡智の座を譲り、我々はその神託を受けるだけでよい。これはきつと人類に美しく馴染むに違いない。高位の者に準じ、公平に正義を規定されることの清しさ。HCのあらゆる能力は大きく人類を凌駕して、神と言つて過言ではない。事実、彼が出した結論は人類が理解出来なくても正しいはずで、悔しくとも理解不可能性を受け入れなければならぬ。例えば優秀な学者が一生をかけて蓄積した、知識と能力によって到達するある理解を一万回繰り返して得られた結論など、そんな絶望的に不可知な領域が無限に存在する。我々は信じる以外に態度を持ちえず、強制的に信仰を取り戻す。

そして私はその神に祈り願うのだ。生物がこの星に誕生して以来最大の、欲張り過ぎた願い。
この「叡智」という榮譽を捧げる代わりに、聖なる「不死」を与えたまえ。最高位の贅を差し出す代わりに願った。全能の者に我々の力では到底手に入れる事が出来なかつた不死の世の実現を依頼した。これまで神と言え

ば沈黙と同義であり。人類の願いを裏切り続けているのが相場であつたが、この新たな神は多弁と同義にして願いを実現する能力がある。

我々人類はパズルを解くのが好きだ。いろいろな問題に対して自ら解決する自由を得て喜びとしてきた。その喜びの先端部分を担う科学者達であつたが、HCとの対比の前にその權威は失墜し、席を明け渡すことになる。そのトリガーを引いたことは当然のごとく同僚の多くの科学者達の恨みを買っているだろう。だが、そもそもそれは合理的ではない。パズルのような遊びと、命にも関わる生活実装とを分けられるなら、分けた方がよいのだ。科学者達が失つたのはパズルを解く喜びではなく、嫌らしい顕示欲を満たす社会的權威だ。神託という言葉にしても、嫌らしい人心掌握の道具として歴史に登場し始める。

ローマ時代、神の言葉とされる神託集が、シビュラと呼ばれる巫女からローマ王タルクィニウス・スペルプスに買い取られた。その後「シビュラの書」は、王の権勢の保持に用いられるのみ。その神託は非公開で、それを持つ王のみが神と繋がっている事になっていた。どんな暴権もそれでまかり通るといふ怪しい構造。非公開の神託は、王のみが神につながっているとするための道具であり、公開することで価値を失う。つまり内容に価値はない。そんなものだから王がシビュラから購入するくだりも極めて足元を見られた売られ方。九巻の神託集を売りつけようと現れたシビュラであつたが、王に高すぎると断られた。すると後日、そのうち三巻を焼き捨てて同額で売ると持ちかける。また断られると、後日また三巻を焼き捨てて残り三巻を同額でと持ちかけた。王はついに言い値で買い取った。システイーナ礼拝堂のミケランジェロが描いた天井画に神託書を持つシビュラ像がある。古代ローマのユピテル神殿に保管されることになる「シビュラの書」を模して編纂された偽書「シビュラの託宣」に姿を変えて、後のユダヤ教の要となり、キリスト教の聖書の一部となつたりする。

だが、現代に於いて遂に実質に価値のある神託が生まれた。光ケーブル繊維の奥に隠れ息づくシビュラの書、

その中に差し込む青い光の固まりは、いずれこちらに神明として答えの光をさしのべる。

不死実現のコンダクターとして神を造る事に関しては、学術権威集団の中で築いて来たキャリアを失うばかりか、人類主権の存亡に干渉するような巨大なリスクである。しかし、それを、私は何の迷いも無く実行したのだ。

さて、何とも大仰な事態だが、その実、私の動機ときたら、主観的内向による極めて個人的なものだ。今冷静に思い返せば、まるでだだをこねて親を困らす悪童。おもちゃ屋の前で床に転がって奇声を発し、過剰に物欲を主張する馬鹿ガキのようだ。長い時間忘れていたくせに、突然目の前に現れた命分に飛びついて支配され、それを手に入れるために禁断の対価を支払うことを躊躇せず心に定めた。その命分に出会った場所は、たしかに童の国。そこには子供用のおもちゃが沢山沢山積み上げられて、無数の風車が回っていた。

2

北国へと旅に出ている。

そしてその旅の終わりに、霊場恐山を訪れたのだった。その時は、そこに命分があるとは思ってもよらない。

死国の入り口と演出されたその地獄様の霊山は、火山地形を利用した演出による異界のテーマパークだ。私は曹洞宗の信者でもなく、このときはまだ何も気が付かないで、単純な好奇心から何かホラーな土着信仰の話題でも手に入るかと、軽い気持ちで青森から下北への切符を買ったのであった。境内に入って初めのうちはまさに想像通りの観光味があった。温泉の小屋があり、そこに湯治目当ての老人が幾人かすでに入浴中。火山性の

地形は高低に富み複雑な迷路のようで、そこに建つ古い建築物がまるで絵に描いたように地獄の風情を醸している。そしてその迷路のような地形を死者達の無数の痕跡が埋め尽くし、ここが人間の生活領域の一つであると、古くからのこの土地に人間が存在していた土着の迫力を見せている。だが、しばしそこで時間を過ごし、そのデテールを見て行くにつれ、観光目的に建てられてはいないこの施設の本当の意味を、和紙に水を染み込ませるように重く確かに実感させられてゆくのがあった。

死んではいけない者が死ぬと、戻らないと知りながらも取り戻そうとする、止むに止まれぬ苦しみを縁者に与える。日常の情緒では対応の術がない苦しみが故に底が知れない。多くは子に死なれた親だ。至る所にその死んではならぬ子達の存在を刻印した道具が立ち並ぶ。幼い者の履く可愛い靴、赤子をあやす無数の風車。広い年代の多種大量の玩具、進学を果たせなかつた子への学用品。その死んではならぬと願う無数の苦しみが形となつて広大な山裾を覆い、私の視界の隅々に広がって見えている。

すると始めは圧倒されて真っ白であった心だが、奥に潜んでいた古く悲しく痛い、この霊山にひしめくものと同様の気持ちと同調して立ち現れ、白地に切り取るようにハッキリと心の中に形を成した。

それは子供の形をしていた。

私には子はいないが、その心に浮かぶ子供の顔は徐々にその正体を明らかにしていった。

死んだ友人だ。

9歳、小学4年生の頃、級友が中学生に懺殺された。保育園の頃からの親友だった。悲惨な事件であったが犯人も捕らえられ、世間的には解決し、葬儀に出席して以来彼の家には一度も向かう機会はなく、彼の情報は全く耳にしなくなった。中学を卒業する頃にはその友人の記憶は私から望めないほどの距離に遠のいていた。周囲の友人達もそうであつたらう。これまで一度も彼の霊前に訪れたことはない。両親の寂しさを思うと胸が引き

裂かれそうになる。きつと私達の心の平安を願えばこそ遠慮して、命日など弔いの儀式の知らせを控えたのだろう。そのお陰であの事件を引きずることもなく少年期を無事終えて平和の内に成人となれた。

今まで忘れていたことを何度も謝った。そしてできるなら、ここなら、会えるのかも知れない。そして、夢遊病者のような足取りでイタコの口寄せの列に並び、盲目ではあるが血色の良い、私の祖母ほどの年齢の女性に、親友の名を告げたのであった。

数珠を数えながら、死口の儀式を踏んで行く。リズムや韻を踏んで何かの口上のように始められ、半ば聞き取れない部分もありながら少し忍耐すると、老女が9歳の男の子に変化した。

「しばらくだな」

咳払いの後、数珠を左右に引き開いてあたかも作文用紙を読み上げる仕事。

「9歳だった僕は中学生の殺人鬼に惨殺された。

殺される前の日、級友と二人で門を出ると、校庭裏の短い雑草が芝生のように広がる空き地の上に、下校途中の子供達十数人がかたまつて人垣が出来ていた。興味を持った僕達二人はその人垣の中に頭を差し込んでみる。小学生達の色とりどりの靴先に囲まれて、老婆が莫産を敷いて座り込み、何かを売っているようだ。下校時の小学生を目当てにした行商人。カラーヒヨコや磁石人形など子供だましなる物を文字通り子供をだまし商う身分の低い者達。その「手品インク」売りの老婆は小さな薬用瓶に赤いインクを入れ、ゴムの蓋を掛けた

物を二十ばかり風呂敷の上に広げ、子供らの集まる頃合いを見定めていた。この商いは、すぐに売りさばきすぐに立ち去らねば、子供らの親などが騙された子の仇に現れもするし、違法なる商いを小学校の教師などに咎められもする。商う物の数を、見物する子の数と見合わせて一気に売り抜く。老婆は今がその時と、いよいよその中身を説明し始めた。老婆の指はしわしわで、齢80は越そうという風で、そんな手が怪しげなる小瓶をつまんだりすれば、本物の魔術として誠に説得力のある体裁を見せるのだった。ゴムの蓋を取ると、白い紙を細く切り刻んだ短冊を一本その中に差し込んだ。引き上げるとその先は深紅に染まり、おどろおどろしい獣の血液が染み込んだように人のそれとは少々異なる鮮やかさを持って日に翳された。すると瞬く間にその血色は、空中の何者かに舐め取られるように消えてしまった。その際に老婆は何かまことしやかに呪文など唱えていたが、誰もがその色の消失は化学的变化に由来する物とたかをくくって見ていたので、老婆の稚拙な演出などまともに聞こうはずが無い。しかし、その不思議な赤い液体は子供らの好奇なる心を十分につかみ取り、さらに、一瓶50円と、一日に割当てられた駄菓子代100円をもって十分余りある安価が提示される。その場で財布を持つていた者は飛びついた。日頃小学校に金銭を持参する習慣が無かった僕は戻るまで売り切れずにいてくれと駆け足で帰宅して、50円を握って駆けつけたが、そこに老婆の姿は跡形もなく、遠くの公園で同年の女子児童などがその瓶を神妙に開けるのを尻目に、落胆の為駄菓子屋に行く気力もうせて道上のヒビの流れを辿るように家に帰った。

何ともくだらない玩具なのだが、買い逃したことが妙に執着心をあおり、明日も下校時にあの老婆がいてくれと願うのであった。布団の中で、自らがその小瓶の赤い液体を白シャツの手首に垂らすのを思う。赤い血が目の前に現れたときの衝撃、怪我、死に対しての本能的な危険信号をその色は持っている。しかし、その色が幻のように消えて行くことで緊張した生命の危機も同時に霧散し、安堵に満たされるのであった。それを3度ほど反

芻するとようやく眠りについた。

今日は必ず買い逃すことのないようにと、ポケットに50円を忍ばせて登校していた。だが、勇んで一番乗りで校門を出てみると、そこには老婆はおらず。考えてみたら、あの手の行商人が連日と居たためしがない。自分の間抜けぶりに恥じ入る。他にそんな間抜けは一人もない。あの小瓶に執着していたのは僕だけであつたらしく、僕のように慌てて走って急いで校舎を出てくる児童はまだ無い。その得も言われぬ劣等感は一入だけ遅刻して既に授業を始めている校舎を仰ぎ見たときと同じだ。

ポケットの中で50円玉の真ん中の穴に指の腹を押し付け、丸い跡を、人差し指の先端に赤く浮き上がらせては眺め、徐々に消えるのを見る。まだなお赤い液体に執着する自分に、諦めろと諭す。馬鹿げたいかがわしい物をせつかく親から貰つたお金で買おうとするなど、実はそんな罪悪感もあるではないかと言ひ聞かせ、親不孝はするなど、あの小瓶を諦めるよう、様々に心を立て直す努力をしつつ一歩一歩家に向かつて歩いて行く。

親不孝と言えば、親より先に死ぬことだ。心の陰の部分にいてふと思ひ出した。

最近この町で連続している児童惨殺事件、その犯人はまだ捕まっていない。

そんな事件に巻き込まれないようにどうやって注意すればいいのか判らないが、こういう狭い道を一人で歩くときこそ危ないのでは。早く表通りへ出ようと早足になった。

だが、

そこに、

奴は、来た。

そして、僕とは

一面識もないくせに、

なれなれしく声を掛けた。

「よう！学校早引けか？ずる休みか？」

いまだ小学校の校舎が低い平屋の都営住宅の上に見えるところで、自転車に乗った中学生が、目の前に回り込むように行く手を阻むのであつた。自転車のハンドルを大きく上に延ばして暴走族が乗るバイクと同じ意匠の改造を施した買ひ物用自転車。服装は白いポロシャツのボタンを胸まで外し、赤いベルトに黒いジーパンをはいている。髪は綺麗に刈られて横分け、目は切れ長のつり目。特徴は乏しい普通の顔だが、頭が悪そうな顔ではない。どちらかと言えば聡明な顔だ。だが、だからこそ好虐の悪意をまるで当然の手続きのように提示でき、反省はせず、受刑を悔罪としてではなく対価を支払う覚悟として解決してしまうような、何処までも負かすことの出来ない狡賢さ。そんな顔は隠しようもなく危険がにじむ。それになおあからさまに血染めの改造ナイフを見せびらかしているの、もうどうもしようもなくすぐに殺人犯人と分かった。

「本当は女の子にしようと思つてたけどお前がいいや」なんて言つてる。中学生か、大きいはまだ少し子供のよう。だが、9歳の僕にとつては体力的にかなわないのは明白なので、何とか助けを呼ぼうとするが、都営住宅を囲む塀が長く続くこの道は人気がまったくない。ガードレールの内側にうまく回り込み時間稼ぎ。

太陽の当たる側に見た顔は、動かない写真のような、もつと残忍で面長で、色が白い。

「お前が刺してる間に首の肉を噛み取つてやる」と威嚇しても「無理だそんなの」と動じない。そして普通に何か腕を突き出して僕の首を切つた。上唇を引き上げて上前歯だけを歯茎まで露出させる醜い笑い方。

僕は即死で、やつぱり親不孝だつたみたいだ。父さん母さんは僕が死んだことを凄く悲しんで殺人鬼を恨んで恨んで復讐を切望して、でもそれを果たせず憔悴して死んでしまった。僕が殺されたことには人を殺す力がある。僕の両親は僕の死によって殺された。僕は自分の死によつて両親を殺してしまったのかもしれない。

あの消えるインクを売っていた老婆はクリーニング店経営者の母親で、その消えるインクは一旦は消えるが空気に触れ続けるとまた赤く発色する染料であった。服に付いてしまうと普通の洗濯法ではその血のような色は全く抜けずクリーニング店で染み抜きの特長技術を要す。つまり、クリーニング屋の客引き詐欺であった。老婆はそんな因果か、交通事故に遭った。ダンブに引きずられ全身赤むけになって死んだ。

でも僕が恨む殺人鬼はまだ生き続けている。少年法という、保護を基礎とした法律によつて、手厚く管理され更正として立派な人間になるように善良な人よりもお金を掛けて教育され、その後すぐに普通の生活に戻れた。

奴はそろそろ、僕のことも忘れた頃か。僕は忘れない。奴が失いたくない物を得たとき、じつくりと考えた復讐を始めよう。絶対に逃がさない。あいつは逃げられない。奴の両親の目の前で、大きく口を開けて奴を嘔み碎き、不味いといつて焼けたアスファルトの上に唾のように吐きだして踏みだして踏みにじつてやる」

口寄せは依頼者の心を直感で読んで、そこから心理医療的な対応をするというのが合理的な学術的解釈だが、私が体験したそのあまりの結果に、今や親友の恨みとしての存在は疑いようがない。やり取りの中で出てきた全ての情報が超常的に事実と合致している事などもはや些細な事だ。明確な恨みの存在。きつとあの殺人鬼はなぶり殺しに遭う。法によつてはその重大な罪を裁けなかったが、その残忍な所行を後悔して居ようが無かるうが、恨みの呪いが凄惨に始められることだろう。それが成就することを復讐鬼として共に願う。

山裾をしばらく進むと、宇曾利湖という大きなカルデラ湖が開ける。この湖の土壌には温泉沈殿物が幾重に

も堆積し金の異常濃集体が多く認められる。高品質の金鉱床でもあるが、濃厚な砒素も含有され採掘は不可能とか。金と猛毒が織りなす美しい湖水のグラデーシオンは、死者の霊体から流れ出た夥しい量の血液が滲んでいるようだ。親友が流した血も消えずにここに流れ込んでいる。あの老婆が売っていたという「消える血の小瓶」の記憶はないが、今や私の心をとらえて放さない。ここに流れ出た夥しい流血が消え、悲劇そのものが幻であつたらと切に願う。

ああ。さてさて、そもそも、この種の悲劇の根源は何かといえばだ。元の元にながら知らぬ振りをして隠れていても、そろそろ見つかるころあいだ。人が知恵を蓄えてようやくそれを言う時が来た。

「死」め。私はこれを呪う。怒りにも似た激しい呪いを。いずれ必ずそのふんぞり返つた悪徳公務員のような永久雇用保証を打ち崩しその権力の座から引きずり落として謝らせ、謝つても許さず、あらゆる場所から追放して、小さく非力な者へと貶めてやる。そして全てが終わつた後は、完全に忘却し、その過去の文献から時々思い出すような事があれば、「死」こんなやつが居たと笑つてやる。

55

千葉に染み込んだ男

格安の中古建て売り住宅。千葉県の重心のあたり、ここは昔のある時期はバブル経済の中で土地が高騰し、多くの山野田畑が造成されて住宅地となったところ。その開発途上で経済破綻が幾度も襲い、その度に地価の大幅暴落を重ね、ついには大量の開発放棄住宅団地が乱立することになった。資産価値は一頃の十分の一。

「土地付き一戸建て、70坪二階建て60平米350万円駅近し」

都市近郊では考えられない値段に驚きながら、若く善良そうな不動産屋と、現地を回った。

「若林さんは東京からですか。こっちはいいところでしょう、田舎で。春には砂嵐も来るんですよ」

あつげらかんとその土地の値段相応な不具合を指摘し「だから安いですけどねーははは」と屈託なく笑う姿に、地元民のあきらめと、まあそれなりに生きている逞しさを感じて幾つか回った中で、一番条件がポンコツそうでないモノを買うことにした。駅近とはいえ車で10分と言うところ。10分間も信号もなく飛ばし続けている距

離はかなりのものだ。しかし滅多に都心に出ることもないだろうから、駅を利用する条件は重要ではない。得てしてこの辺りはコンピュータネットワークが貧弱だが、首都圏警察機構を持つ衛星経由の高速通信回線は、千葉中央域であれば何処でも接続可能で、高品位の設備を持つ私にはむしろ機能を密かに利用しつつ目立たない良い位置にある。

生活する上で警戒するのは上水と、排水設備だ。この地域の原野を造成したところでは、まずたいてい行政側のインフラが届いていない。丘や谷がデコボコと続く狭い道の果てにある造成地だ、高低差に影響を大きく受ける水回りの設備は特に通しにくい。電気と電話は来ているが、設備に莫大なコストのかかる上下水道が当然のごとく不備なのだ。よって、住宅団地が独自にそれらの設備をし、それぞれの家庭が資金分担しながらインフラを維持して行く開発計画となる。しかし、開発が途中で破綻していると、設備のメンテナンスが不可能となり、インフラを維持できないケースが多く、集中井戸や集中浄化槽が死んでいる。水も出なけりゃ、汚水も出せない。つまり生活できない。

そんな住めない状態なので格安になるのであった。

そんなところばかりなのだが、そこでも生活の術はある。まず、新たに自分で井戸を掘る。井戸穴のボウリングと、汲み上げポンプとタンクのセット費用が60万円ぐらいかかる。水質の保証無しだが、えてして初めの内はおいしい水が出る。しばらくすると数十メートルから100メートルの地中深くにのぼされた鉄パイプが錆び、加えて穴の中の雑菌が悪さをして水質が悪化して行く。10年ごとにオーバーホールが必要。これが結構高額だ。

上水はとりあえず現実的な投資で維持が可能だ、飲み水はペットボトルを買って、洗濯や風呂トイレは井戸水と分ければ水質の問題はない。さて問題は下水。下水道がないことがほとんどだが、加えて側溝もない事が多い、側溝とは車道の脇にあるあの細いドブだが、それがないと、自宅敷地内に浄化槽を付けても汚水の排出先がない。そこで、浸透式という自分の土地の地面に汚水を染み込ませてしまう方法をとるのが一般的だ。1メートル四方深さ3メートルの穴を掘り、底に砂利を敷いてネットを張り、水分を染み込ませる。風呂や洗濯など、よくもあんなに大量の水が染み込むと思う。だが、実際は5年から10年で汚れが土砂の間にベトリと詰まり、水分を吸収できなくなる。すると、また別の場所に穴を掘るのだそう、普通の住宅の敷地内であれば、3カ所も開けたら後がない。つまり30年で浸透式は終わり。こんなどうにも終わりまくった土地は本当に格安となる。が、そこは我慢して避けた方が無難だ。しかしその後も汚水処理方法はあることはある。蒸散式という方法だ。太陽光や風を利用して水分を蒸発させる最終的な方法。考えてみると、風呂桶一杯の水を茹でて全部蒸発させるのに、どれだけ大きなエネルギーが必要か。毎日それ以上の排水が出るわけだが、それを、自然に揮発するにまかせるとは、なんだか無理っぽい。きっと大きな設備となり、費用もかかるのだろう。

と言うわけで、汚水を出して地面に染み込ませ、また再び井戸で汲み上げて飲むと言う図式は不気味だが、多くがこの方法で暮らしているのが現状。

さて、次に警戒すべきは隣人である。格安な物件地域にたどり着く者はそれだけの理由がある。まず少なくとも経済的に大成功してはいない。もしくは捨てるように荒く使うつもりで購入している場合もある。一方、バブル経済全盛の頃に高額で購入したセカンドライフ組はひどく老人化している。そして、老後を安寧とする意思とはずれて住みにくくなった地域開発に怒り、しかし開発業者はあらかた倒産し、怒りの矛先を失ってそのエネルギーを蓄え続けている。また、地価大暴落後、資産が大量蒸発していることを苦に精神を病んでいる者もいる。そんな、人間的負のエネルギーの脅威を警戒して、近所付き合いがスムーズに行くか簡単に観察しておく必要もあるのだ。

窓を見ると、障子がバリバリに破れたままになっている。

路上駐車しまくり、それがすごい改造車。4メートルの羽が付いてるとか。

植木鉢が氾濫し路上を私有化。

大量の猫避けペットボトルを隣家の境界に。

常に窓からこちらをのぞき見ている。など、など。

しかし、そう意気込んで観察すると、全ての物件において、等しく不気味な雰囲気を感じてしまう。幾日かに分けて回ったが、その内にそれも慣れてしまつて、気が付くと、典型的な破綻団地の中にある、クリーム色の家を買っていた。

世の中の流れの影響から取り残され、しばらくして人知れず死んで機能喪失に陥る私と、インフラの不備で居住にタイムリミットがあるこの土地とは、悲しくも最後は大自然の浄化に任せるという同じ立場として共感を持てる。私が孤独に余生を送るには、整合性のある場所であった。そして密かに能率的に、残された使命を果たせる。

私の体には若返りの効果は見られない。一時は体に変化して身長が馬鹿に伸びた事もあったがそれ以上の変化は進まない。特に私には適正が無いようだ。ほとんどの人間が順調に身体改革の行程を進んで未来永劫と続く不死の世界への階段を昇つてゆく。だが私はパラダイスの入り口に辿り着きながら拒まれた。その理由は判っている。その美しい世界に相応しくないからだ。

この危険な独善者は、平和な新世界の始まりにはいなくなる。

特進高校を辞してからすぐに、かつての科学者時代の能力を駆使して準備を整えた。密かに武器をかき集め、

犯罪者情報の入手と操作の為に自ら設計した大型のコンピューターをあつらえて、周到に且つ迅速に計画を巡らせ使命を果たして行つた。次の世に残してはならない毒の芽を一つでも多く摘まなければならぬ。不死の世が来る前に殺せるうちになるべく多くの悪人を殺すのだ。滅びの浄化を失つた後は悪も恨みも滅ばせない。毒芽から流れ出た毒水は流れ去らず浸透式の浄化槽のように土壌に染み込んで永遠に汚染を取り除けなくなる。なので、まずはその毒の芽をなるべく多く摘んでおく事が、裏切りへのささやかな罪滅ぼしである。そもそも河を埋め立て人類を浄化困難な土壌に変質せしめたのは私の仕事であらうから。

毒芽を摘む作業は楽しい作業ではない。不快な背徳の極みに身を置く犯罪者に身を貶めねばならない。様々な罪深い準備の中、特に殺人行程に関する事は苦痛だ。武器を集める事ですら性に合わなかった。ほとんどは遠迂回ネットワーク内で、取引相手の顔も見ないで済む方法で処理したが、人殺しの道具を作り売る者の性根の腐った悪質に触れるのが苦痛であった。ましてや格闘術を習得する過程で集めた資料のことがよく不愉快であった。暴力に帰属意識を見出した者の凶暴な悪顔は耐えられないほど醜いのだが、そんな者が作り出した技術が必要とする自分に対しても不愉快が極まりない。時として嘔吐するほどだ。

そんな苦渋に満ちた殺人技術の取得を始めるのと同時に、情報環境スキルアップのための設備拡充と、事業拠点を設けるべく不動産の調査をする。これはまあまあ楽しい作業であった。貯金と退職金のほとんどを投入して、小さいが国家規模の処理能力を持つ情報基地を作るのだ。そして中でも家を買うのは楽しかった。家に回せる費用は限られていたが、その縛りが、慎ましくも逞しい小市民然とした喜びを与える。予算を提示して、相応の場所を選んでゆく。これまで家を買った事が無かつたのでわからなかったが、ささやかであれ、自分の住処を選ぶ作業はとても楽しい娯楽となった。

住んで5年、まだ井戸水は正常である。水質も悪くないと言うので飲料にも使い続けている。ここの井戸水は

軟水系で、茶を入れると結構うまいのが近頃自慢になってきている程だ。前の持ち主が掘った浸透式の浄化槽は、そろそろ限界が近いらしく、汚水の処理能力が格段に落ちてきた。近い内に新たな浸透槽を掘らなくてはならないだろうが、今のところ湯船に入る回数を減らして対応できそうだ。

大金をかけ構築した計画通り、未だ発覚する気配はなく、順調に暗殺事業を続けられている。元々不快な仕事だったため、感情を押し殺して、極めて淡々とこなしている。対象は放免されている凶悪犯罪者。多くは少年犯罪で、我が親友の仇も四番目に果たした。人生を賭した目的の出発点となった仇であったはずなのに、その時も、ただ淡々と、何の達成感も覚えなかった。独自捜査で居住場所を特定できた順番と言うだけだ。

最近また一人、凶悪犯罪経歴者の住所を特定したのだが、それが、極めて近所であった。驚いたが、よく考えると必然でもある。ここは都会に居心地の良い者が集まる土地という事か。その近所の犯罪歴者と私は、社会からの距離で言えば同類だ。しかも私の方が多く殺しているし、ましてや暗殺者としてもまだ現役で、有能だ。今や殺人鬼の私が言うのも何だが、ここは犯罪者で満ちた恐ろしい土地だ。凶悪犯罪でなければもつと多くの犯罪歴者がターゲットリストに浮かび上がるに違いない。

「その近所様は、多分あの家だなあ。前から典型例として気になっていたし」

私の家建つ旧造成地は、雑林におおわれた丘の中腹に埋まり消えようとしていた。アスファルト道路は木の根で押し上げられてデコボコ。家の背面は高い杉と雑木の斑状の丘陵となり、密生した笹に阻まれてその林の中には進入不能。藪蚊が多く、ときどき殺虫剤を撒く。その雑木林を背にしてズラリと十数軒の建て売り住宅が並んでいる。大半が空き家だ。それぞれ色を変えてあるが皆一様に安い同一種類の煉瓦調エンボス加工が施された外壁材。よく判らなかつたのだがピンクや紫など派手すぎる外壁色の家に限って居住者がいる不思議。観察するとその事情が判明した。塗りが新しい。入居後に自分で選択した色を既製品の上に塗装しているわけだ。

年配者が選択する色には見えないが、事実はそのようになっていく。塗装をしているのは外壁が痛んできたため外観を守るためにきちんと環境投資している者で、外壁色をシヨッキングピンクに選択する驚きのセンスではあるが比較的まともなのだ。

凶悪犯罪歴保持者として特定されたその家の住人は、外壁を塗るような神経はない。コンクリート由来のサイディングは黒く水カビが生え、雨水が垂れる部分は緑色のコケが厚く生えている。雨樋上には土砂がたまつてそこに雑草が生え、何世代分かの枯れた茎が固まりとなつて突き出ている中に、大型のセイタカアワダチソウの茎がアンテナのように数本立っている。その廃屋ぶりは周囲に点在する不在住宅よりも濃厚だ。入居者がいない住宅は不動産屋か債権者が売りに出す前提を考えて、定期的に整えている形跡があり、多少は清掃をしている。

カビの黒と苔の緑で構成された斑はサイディング材の薄い茶色の上に大きくのたくつて、まるで腐乱死体の様だ。駐車場に停まる黒い国産車と、庭に積まれた健康器具の種類から、そこに生活する者と、かつての家族構成とその歴史を見ることが出来る。

その物件を購入した家族は、犯罪者となつた子供をつれて世間から逃げるため、数十年前にそこを買って移住してきた。事件当時働き盛りだった両親は長い隠棲生活を経て今や他界し、犯罪者である子供の一人暮らし。その子供の年齢は、成人を遙か昔に終えて婚期を些か超えている。車はぴかぴかとかまめに洗われて光っているが、親の遺物である建物には何の愛着も示さない状態で住み続けているのだ。

「ラサーフか、」

危険な臭いがする。まだ密かに現役かもしれない。車の車種がその危険を裏付けるようにワゴン車だ。

私も軽のワゴンだ。しかし4輪駆動の高性能車でスピードも出る。どんな山道悪路でも登って行ける。耕され

たふかふかな畑の中を軽トラックが平気で走っているのを見てその車を購入することに決めた。普通の乗用車が畑に突っ込んだら、まず脱出は不可能だ。雑木林の落ち葉が深く積もった、軟地盤の狭い林道に車を入れて行く必要性に迫られていた私には、打って付けの車種であった。世を疎むタイプの標的は人目を避け、そんな処に住んでいる場合が多いのだった。

そう言ったディテールはまるで殺人鬼と同じだな、と殺人鬼となった自分を振り返る。

不死の世界でも悪性因子を淘汰する手法が確立されるだろう。その世界では罪を隠す事がしにくくなる。傷付けられた者はこれまでのように死んで告発のチャンスを失う事はなく、其所に至る経緯や問題点の情報も多くなるはずだ。きっとこれまでよりも合理的で平和な統治が可能だ。しかし、始めからはうまくいかない。悪も同時に不死身となってしまうからだ。なので、完全にバトンが渡るまで、快樂殺人者だけは私の手で出来るだけ摘んでおきたい。やっっている事は奴らと同じ殺人だ。時としてふと鬼から人に戻ることがある。庭に来る動物の仕草や、湯船にかかる時の湯気の匂い、両親との記憶。少し心が満ちる時にこそ暗い使命感から解き放たれて自らの荒廃した心を嘆く。

しかし、薄暗い私の書斎に設置された衛星情報端末の前に座ると、敬虔な使命感に心が彩られ、次の目標に向かつて計画を練るのだ。

計算機の研究を最先端で行っていた者にとっては、警察のセキュリティをくぐり抜ける事などネットワークの接続と同時に出来る。今のところH.Cの気配はまだ薄く、その情報管理は旧態依然とした物だ。信頼性を重視した物ほど改革を恐れ、逆に危険な場所に取り残されている。私の操作で地下通信設備事業を少しずつつ動かし、行政自らに架空工事を要請して作らせたハッキング用の設備。そこから有線し、警察署内と錯覚させた私専用の端末を密かに設置している。指揮系統にもリンク可能であるため、欠落した情報があれば、警察官に指

示を出して調査させる事も出来る。これまでもその端末を元に警察のデータベースから多くの凶悪殺人鬼を捜し出し、始末してきた。凶悪犯罪人が失踪しても、それを問題にする縁者は少なく、捜査の要請などの反応は見られない。データベース内の情報の更新も希で、たまに変化があるとしても「失踪中」と言う文字が気怠そうに打ち込まれているぐらいだ。元々信用のある者達ではないからそんなものだ。両親が保護し続けている場合も多いが、必ず隙を見せる。そのような難易度の高いターゲットは数ヶ月の準備を経て条件を整える事もあるが、何事にも正解答があり、私にはそれを見つけ出す能力がある。また余分な快樂目的もない。殺す時もあるだけシンプルに痛みを与えず短時間で終わらせる。死体は必ずこの家に持ち帰り、完全に焼却する。庭に設置した水槽透過抜気式の防臭システムは、人を焼く臭いを一切出さない。

これまで36人の罪深き人間を葬ってきた。だが、そろそろタイムリミットだ。不死が完成しつつある。殺すのに大変な労力がかかるようになってきた。劇症性の猛毒をアンプル型の銃弾によって頸部大動脈に打ち込む。以前であればそれで即死だ。不死の最終過程に入った人体は、この段階では一時的に倒したにすぎない。死体は手足を折りたたんだコンパクトな状態で車輪の付いたホルダーに固定して運び去る。アンプル弾はそれ自体にも十分物理的殺傷力があり、頸椎を砕き延髄を破壊している。毒は蘇生に至る段階で作用する仕掛けだ。だがそれでも蘇生してしまう。車に積み込んでから大型テレビの梱包材を模した段ボール製死体ラックに入れると、出血を止めるためのコルク栓を抜いてその頸部の小さな銃創にスタン端子を入れておく。心音をモニターし、反応があれば自動的にスタンガンにスイッチが入り心臓を止め、蘇生活動を麻痺させておくのだ。だが、それに蘇生が追いつくのも、そう遠くはない。

ほかにもリミットはある。情報操作に限界が近づいている。これまで警察のプロ集団による幾度かの本格的な情報漏洩テストをくぐり抜けてきた。だが、これまで生みの親の私に全面協力してきたH.Cシステムが、私の呪

縛から離れる予定だ。すると瞬時に他のHIC管理システムが私の存在に気が付く。次で最後の仕事となるだろう。数日かけて、装備の点検と侵入計画を練った。

夕闇が深くなりヒグラシが鳴き止む頃、ヤブ蚊対策に防虫スプレーをたっぷりかけて、杉と笹を縫い込んだギリースーツを羽織り暗視ゴーグルをかけて、蛇のように裏の雑木林を進んで行く。人が一歩も踏み込めないほど密生した笹は、赤外線レーザーブレードで根本を熱して柔らかくし、一時的にわだちを作る。ショットガンほどの大きな道具だが下草に覆われた雑木林を進むには大変便利だ。照射するそばからサラサラと左右に笹が開かれて道を作る。特殊波長の赤外線で変成した下草は茹でたように固さを失い、踏んでも音を立たない。そしてしばらくするとなんの証拠も残さず藪は回復する。肉眼では見えない熱線を発しながら、笹用の静音ソール付きブーツと特殊な隠密歩行法によって一切音を立てずに藪を進んで行く。6軒先のその家まで、空き家と不活性な老人宅ばかり。じつとテレビを見ているか早くも就寝している。注意しなければならぬのは犬だ。しかし、このハイテク装置は、犬の感知力を凌駕して隠密生に優れている。いつも新聞配達にけたたましく吠える柴犬も小屋から出てこない。そして、その問題の家の裏に出ると、林の縁に、じつと身を潜め、庭越しに観察した。

「ああ、やっつてるやっつてる」

その男は、庭に面した居間で、サバイバルナイフを構え、ポーズを取っていた。漆黒の雑木林に面したテラス窓には、明るい内側から自分の姿が鏡状に映り込んでいるのだろう。ビキニパンツ一枚で、格闘ポーズを取っては見える。自己愛、自己陶酔的に己の体を見て遊んでいる。その半裸の自分が映り込んでいる漆黒の中に、ブッシ

ユカモフラージュ装備の私が紛れているとは思わないだろう。

時間をかけて侵入のタイミングを待つ。しかし、侵入の必要はないだろう。庭に面した手前の二部屋と奥の二部屋は襖が取り払われて4部屋が見渡せる一まとまりのフロアとなっている。室内は汚らしく衣類が散乱し、障害物が多くはあるが、スタン・ダーツの発射には窓を一つ少し開ければ事足りる。薄いへら型の開錠器具をアルミサッシのバックシンから差し込んで室中でマニピュレーターとして展開し、鍵を回すのだ。二階の寝室に上がる前に手っ取り早く済ませよう。

一撃で意識を失う即効性のスタン剤を静脈に打ち込む高性能の空気銃。狙撃銃にしては非常に小型で。音が全く出ない。単発のボルトアクションのため胸ポケットのケースから二発のスタン・ダーツを取り出して、一発を銃に装填、予備の一発はアシスト側の手袋の指先に設けられたホルダーに差し込む。初弾を外したときに迅速に次弾を送り込むための工夫だ。

すると、そのチャンスがやってきた。その男は窓に近づきカラカラとテラス窓を開けた。私にスタン弾を打ち込まれるべく半裸なのか、そして窓を開けやがった。こいつは馬鹿みたいに無防備。テント状に張ったギリースーツの中で腕を上げアウターサイトゲージを目の前に。照準に男の胸の少し右を捕らえる。

「うわあ、外あちー！」

引き金をゆつくりと絞る。今だ！

「蚊が入るから閉めなよ」

「でもよ、この音やばくね、このオンボロクーラー、そろそろ何とかしないと、壊れたらやばいわ」

「冷たいのが逃げるから速く閉めて」

カラカラとテラス窓が閉められた。

「おやあ？一人暮らしのはずだが、女の声だ」

奥からにこにこしながら、半裸の女性が出て来た。男が手にしていたサバイバルナイフをもぎ取ると、男の胸を何度もつついた。切れない。突く度に刃先がクニャクニャと潰れる。ははあ、サバゲー用のダミーナイフか。硬性ゴムの。あ、でもちよつと痛がつてる。この二人は恋人同士だ。男がキスをしようとしてダミーナイフで叩かれてる。今度はけつこ痛そうだ。男の口がイテテと言う形。なんか楽しそう。男の姿は二十歳過ぎ女性もよく見ればそのぐらいか。一番いい時代だな。噂では確かそのあたりに着地するように若返るそうだから、彼等もその口か。以前調べた居住者移動詳細情報によれば、この家の住人は男性一人、あの男性は40代のはずだ。若返りに間に合ったのだなあ。ターニングポイントは50代だそう。あ、彼女謝ってる。ゴメン痛かった？と言っている。キスしてる。

2時間近くその藪の中において、二人が交わす愛情の交換を眺めていた。最先端の高級な軍事装備を用いて覗きをしているとは。何とも不思議な間抜けな状況だ。しかし、性的に興奮する事はなかった。ヒグラシの鳴き声に美しい予感を感じるように、とても美しいものとして鑑賞し続けた。愉快な安堵を伴った感動さえ覚える。HC開発で私が行った人類に対する干渉は間違いではなかったな。私も間に合えば良かったが、なかなか全てを手に入れる事は難しい。しかし、それにしてもこいつら、なんでこんなに家汚くしてる。腹の底から笑いがこみ上げてきた。

「男ならまだしも、あの女、平気なの？」

小刻みに笑いながら帰路についた。

「家がぼろぼろ汚くても、車はつるつる綺麗、体も美しい！まるで糞虫オオセンチコガネだ」
メタリックブルーに輝く美しいオオセンチコガネは動物の糞に潜り込み暮らす。

家に帰り着いて大笑いした。そして、号泣した。

なあ親友。残してくれた呪いは君が一人で続けてくれ。私はもう、必然を失ったよ。36人も殺してしまった。今となつては殺す必要があつたのかまったく判らない。

この5年間で、親友を殺した元中学生を筆頭に、警察の資料上上がる解放された殺人鬼を狙い、復讐鬼として殺しの限りを尽くした。

心のどこかで、もう殺す事は出来ない。ついに完全に不死の領域に人類が突入したと感じた。自分のように追いつけなかつた者を残して。

そして更に、自分の死期を悟った。今死ぬなと思った。不死の境界の外において永遠の時間を手に入れた集団から切り離され死の淵に落下する。その境界線が何処なのか無意識のうちにならずと計算していた。今日その結論が無意識から提示されたのだ。それは死を受け入れるべき壁であり、自ら数える死への秒読みであった。そして引き金を引いた。

庭先で、ギリースーツを羽織り、暗視スコープを握ったまま死んだ。

書斎では情報端末が自動的に私の代わりに生活に必要な手続きをこなす。時には私の声をまねて音声通信により対応したりもする。私が調整した高性能なアバターとして機能し続けるだろう。そうして、私の死体は誰にも知られず、激しい夏の日光によつて腐敗し、強い腐臭が立ち登っても隣家に人はおらず気付かれず、体は完全に溶け白骨化した。人体の多くの成分はその土中に浸透した。浸透式の汚水処理と同様に土壌を汚染しつつ、染み込んでいった。

以上

第一章のみ掲載

「不死」

著者 西尾康之

2012年執筆

第二章 不死・∞

第三章 昇天

掲載準備中